

現  
歐  
洲  
  
完

026838-000-3

81-443

現歐洲

福本 日南/著

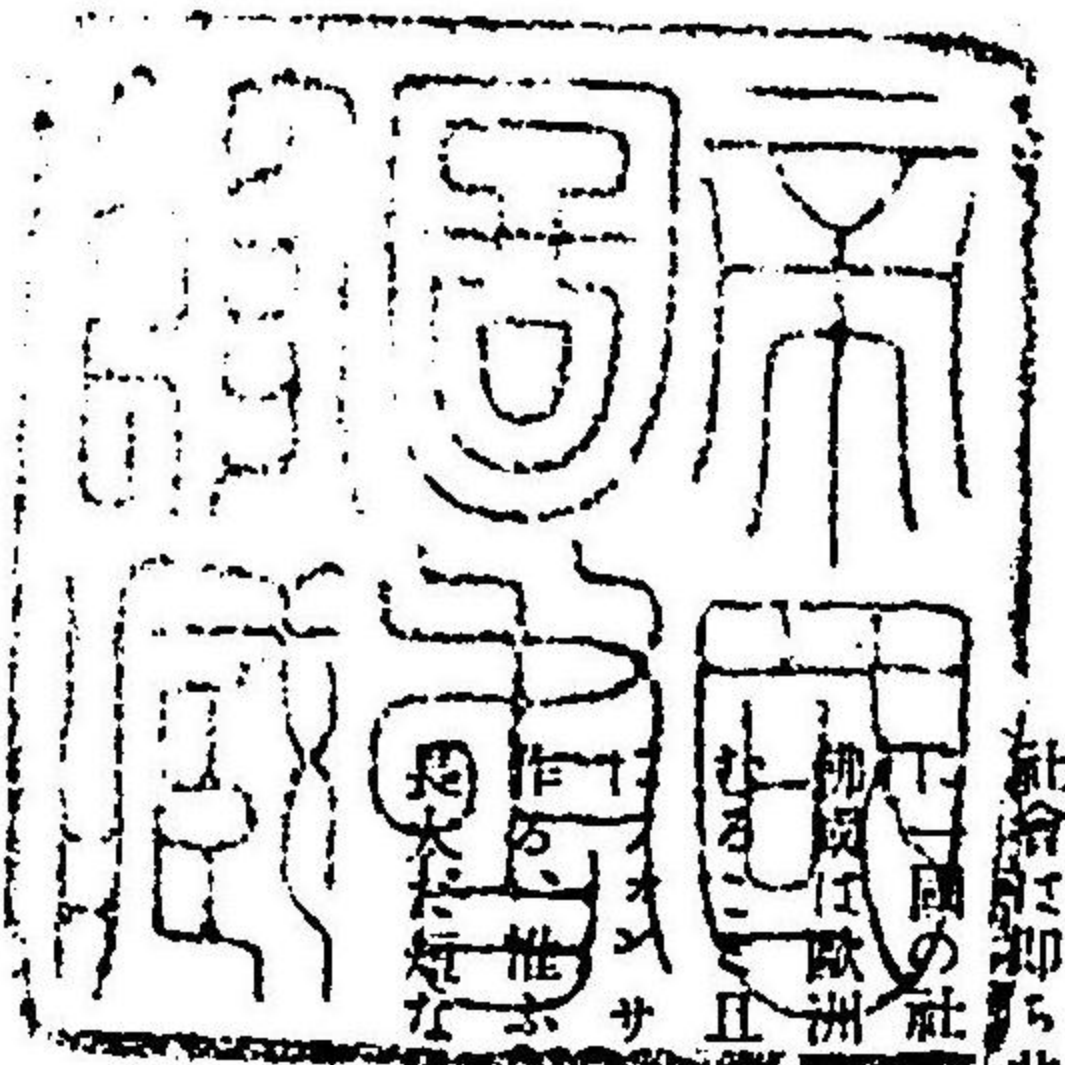
M33

ADF-0019





81-442



小引

小引

今日の歐洲を知らんと欲せば、先づ之に觀兵式を興ふ可し、其制度、其經濟、其科學、其文學、其美術、其性格等を呼出し、列を正して一顧我前を巡行せしむ可し、而る後ら始めて其文明を概観するを得ん。

余以謂へらく、歐洲の事情は共同的なり、山河を引來りて國城をこそ別ちたれ、社會を即ち共通的なり、邦國の進運に連連こそあれ、文明は即ち大同的なり、故に國の社會全體を概観せば、他邦は思ひ半ばに過ぎん。

佛國は歐洲の上游に在り、夙に文明の中心と稱せらる、余偶々其地に遊ぶ、足を駐るに、且つ餘、先づ之に觀兵式を興へんと欲す、幸にして『佛國』の著者サツあり、余其人の肩に倚りて、且つ觀し且つ記し、茲に『現歐洲』を撰ぶに、惟だ其見の透徹せざる、矮人觀場の嘲あらん、是れ辭する所にあらず、身も大に短なればなり。

日 南





# 現 歐 洲

## 目 次

### 佛國の現制

政府	一
大統領	三
租税及歳計豫算	五
國設諸制 一 (内閣、外務、大藏、内務)	七
國設諸制 二 (工務、農務、商務)	八
國設諸制 三 (陸軍)	一〇
國設諸制 四 (海軍)	一二
國設諸制 五 (植民、司法)	一四
國設諸制 六 (文部、教部)	一六
國設諸制 七 (美術)	一九

目次



私設諸制……………三二

佛國の經濟……………二七

農業……………二七

農産物……………二八

家畜漁業……………三〇

工業鑛業……………三二

織物衣服……………三四

艦船兵器及機械の製造……………三六

各種の製造……………三八

商業……………四〇

交通……………四一

佛國の科學……………四五

數學……………四五

理學……………四七

化學……………四八

工業的發明……………五一

博物學……………五三

生理學……………五五

史學……………五八

哲學……………六二

社會學……………六三

佛國の文學……………六五

十九世紀初葉の文學……………六五

近體文學の起源……………六九

二大文豪 上……………七二

二大文豪 下……………七五

近體派……………七八

自然派……………八〇



小説……………八一

院本……………八五

諷刺及辯論……………八九

文學的批評……………九一

佛國の美術……………九三

  建築術及記念物  上……………九三

  建築術及記念物  下……………九六

彫刻術……………九八

「クラシック」畫派……………一〇二

近體畫派……………一〇四

新「クラシック」畫派……………一〇七

景色畫派……………一〇七

現實畫派……………一一〇

印象畫派及徵象畫派……………一一一

十九世紀初葉の音樂……………一二二

十九世紀中葉の音樂……………一二三

十九世紀季葉の音樂……………一二七

佛國の性格

地勢及人民……………一二〇

氣風  上……………一二二

氣風  下……………一二六

智能……………一二九

徳能……………一三二

勢力……………一三四



# 現歐洲

## 佛國の現制

### 政府

佛蘭西は一共和國なり。凡そ佛蘭西人たる者は法の前に同等を有せり、人民  
ぞ實に主權者なる。其國には代表者を置きて政を作せり。其代表者は最低  
なるものより最高なるものに至るまで、一貫して皆選舉體を爲せり。是故に  
佛蘭西人にして其齡二十一歳に達し、六箇月以上町村に住する者は、裁判宣告  
に由りて公民權を失墜せざる限は、皆選舉人たるなり。

町村コムミュニ、ミユニシパレの選舉人は以て町村會カンストンを選舉すなり、之を町村の代表とす、其町村會の  
數は三萬六千を算す。更に上りて郷カントン數町村の聚合の選舉人は以て郡區會を  
選舉すなり、即ち其郡區會は郡區アロンジスマンの代表とす、現に郷の數は二千八百七十一、郡  
區の數は三百六十二を數ふ。郡の選舉人は同時に亦州會コムモイニ、ゼナレを選舉すなり、即



ち其州會は州Departementの代表とす、州の數は八十六に上れり。(其の所謂州は今日の我府縣として視るを得べし)以上の町村會郡區會及州會は政略上の事に干預するを得ざるなり。

是れ經國上第一の秩敘ともいふを得ん乎、新造の選舉制國民は往々にして之を混淆するの狀あり、識者の注意を要す。

國政の事は上下兩院をして之に干預せしむ、是れ即ち國民の代表たるものなり。

其下院議員は各州各一名を選舉すること、然も州の人口十萬を超ゆる毎に更に一名を増選す。其議員の總數は約六百名あり、内六名はアルゼリーより、又若干名は其他の植民地より出だす、其任期は四箇年とす。

其上院議員は各州及植民地に於ける候補名簿によりて投票選舉するものとす、即ち之に關しては町村會郡區會及州會より委員を出し各州の下に選舉團體を作り、之より選舉するものとす、其の上院議員の總數は三百名とし、三年毎に之を改選す。

此上下兩院は立法權を有し、一切の法律は必らず兩院の協賛を経ざる可からず。而して兩院は歳計豫算を協定し、並租税の増減興廢を議定するに任せり。  
 ・佛國に於ける上下兩院議長の地位は、實に諸省大臣の上に在り、是れ共和政體の然らしむる所にして、我國の如き必らずしも之に倣ふの要なしと雖も、既に代議制を實行せる今日に於ては參酌する所なかるべからず。

### 大統領

大統領の任期は七箇年とす、改選の期に達すれば、上下兩院の議員威爾塞の宮殿に合し、所謂國民會議を構成し、更に大統領を選舉す、其の威爾塞の宮殿に於てするは、以て古例に遵ふなり。而して大統領は陸海の兩軍を統帥し、内閣の大臣を任免し文武の官僚を易置し、及赦免の權を有せり。

其他大統領と下院との間、若くは下院と上院との間に一致を缺く場合には、大統領は上院の協賛を経て、下院を解散することを得。

内閣には十大臣あり、十大臣は其行政及政略上の施設に關し、下院に對して連帶責任を有せり。故に其爲施たる、下院多數の公論と常に一致することを要す。



す。其中の一大臣にして下院に多数を制する能はず、一朝少数に陥いる時は、慣例上直に自ら職を辭す。又一大臣にして法律を干したる者ある時は、下院之を彈劾し、上院之を裁判す。要するに共和國の大統領は内閣大臣の和協贊翼を得るに非ざる以上は、一事をも爲すを得ず。

州の行政權は知事に由り、郡區の行政權は郡區長に由り、町村の行政權は町村長に由りて代表せらる。其町村長たる者は、町村會員中より選舉せらる。但し巴黎と里昂の二府は特別市制に由りて選任するものとす。

是故に凡そ佛國人たる者は、直接か若くは間接に一切の行政員を選任することを得、故に各人各個國民的主權を有せざる者はあらず。

此他佛國政府内には參事院コンセイルを置き、法律、勅令及行政上の規定に關する草案を起し、並行政官衙と人民間の訴訟に對する裁判の事を掌る。

是れ我法制局と行政裁判所とを合併したるが如きものなり、我國民の人權を進めんと欲せば、現制の行政裁判組織に關し、之が審按檢討の要なからずや、何となれば、往時の或者は是を以て政府者權力の一城壁として遺存した

ればなり、識者の一顧を煩はさん。

### 租税及歳計豫算

租税の主なるものを擧ぐれば、

第一は間税とす、即ち

飲料税、烟草税、旅客及商品の運搬税、火藥税、其他若干の生産税と爲す。

以上間税收入は、歳計豫算の主たる財源なり（其額十億法以上に達せり）

此他間税に屬するものは

賣高貸借等の登記及印紙税、關税と爲す。

第二は直税なり、即ち

地租、及家屋税、人頭税、及動産税、戸税、及窓税、專賣特許税とす。

中に就き人頭税は三日間の作業に直するを標準とせしものなり、蓋し古は我往昔の貢役と一般三日間公役に服せしめたるものなりと。又其動産税は借居人に對し屋賃の多寡を標準とし之を課す。其戸税及窓税に至りては讀みて字の如く、戸及窓の數に由りて課するの税なり、是が爲め人情納税額の少か



らんことを希ひ、佛國の家屋は勉めて戸窓の數を減するの傾あり、一般の衛生に影響すること少からずとて衛生論者は往々之に反對するを見る。

尙ほ歳計豫算の財源たるものは、

郵便、及電信、國有の土地及森林等よりの收入とす。

其他各都市の多くは、其都市に入來る商品に對し、入市税を課するの特權を享有せり、是れ固より所謂租税以外のものと爲す。現に巴黎の入市税は一億二千萬元ありて、各都市全體の收入に匹敵せり。

按するに佛國の歳計豫算は三十億法を超ゆ。而して其國債は三百十億法あり、年々十億法以上を償却せり。

凡そ國債の最多額なるものを佛國とす、之に次ぐものは露國なり、其額二百三十億法あり、復た之に次ぐものは英國なり、其額百七十億に幾し、惟ふに英佛の富を以てすれば、國債の多額彼が如くなるも、償還に於て疑懼あらじ、獨り露國に至りては財源果して英佛の如くなるや否や、財政果して英佛の如くなるや否や、露國に觀る者此點に按到せば、彼に對する加減を知らん。

### 國設諸制 一 (内閣、外務、大藏、内務)

佛國の行政組織たる其の來ること久し、其源に溯れば近古王朝が封建制に克ち、政權を中央に統一せし時代に濫觴せり、降りて十八世紀の末葉に至り、政體に一大革命を見たりと雖も、行政組織の大體は依然保守せられ、爾來コンシユラ時代、帝政時代を経て、益々發達し、終に今日の現制を見るには至りたり。

**内閣** 會議なるものは諸省の大臣を以て構成せり、之が總理を内閣議長とす、諸省大臣中の一人を以て之に任す、我國の如く抽象的に別に内閣あるに非ず、從ひて抽象的に内閣總理大臣あるに非ず、故に内閣議長たる者は必らず何れの省かの大臣たらざる可からず、其の内閣會議の如き、或は大統領官邸に於て之を開き、或は諸省の一に於て之を開く、初より一定の場處あるにはあらず。

**外務** 大臣は列國に對する政略及貿易上の事を知り、列國に配置せる大使館、公使館及領事館を統べ、其他チュニヰ、及マダガスカルの保護を掌る。

**大藏** 大臣は租税の徵收、國費の支出を掌り、并貨幣及貨牌の鑄造に任す。又國債局、金庫局、預金局、佛蘭西銀行、佛蘭西勸業銀行を監督す。



會計検査院は行政上一切支出の検査に任せり。  
 郵便及電信に關する一切の行政も亦大藏大臣の司掌に屬せり、從ひて電信高等學校の如き、亦其監督の下に在り。  
 内務大臣は内務一般及諸州の行政に任し、監獄、警察、救恤、出版、新聞等の事項皆其監督する所なり。又大臣監督の下に濟貧會議、衛生會議等の諸會議あり。諸州の知事、郡區長等は皆大臣命令の下に在り。  
 内務省の下には、幼育學校及聾啞學校ありて之に屬す。

國設諸制 一(工務、農務、商務)

工務とは公共的土木の謂にして、之が大臣たる者は橋梁及溝渠の行政、道路、航路并港津の維持、鐵道の監督、鑛山の行政等を掌る。此省に屬するものにして、巴黎に橋梁溝渠學校及鑛山學校あり。  
 農務大臣監督の下には、各州に農事諮問會及農會あり。並農業協會、牧畜協會、競馬會等あり。其他此省に屬するものを擧ぐれば、ペンに於ける牧馬學校、ラムアイエーの牧羊所(是れ十八世紀に、メリノー種の羊を佛國に移殖したるを

以て著名なるもの)耕術學校、農業講習所、グリニヨソナント及モンペリエーの三農學校、テルフォル、里昂及ツールーズの三家畜學校、ナンシーの森林學校、農學師範學校、佛國農業國民協會等あり。  
 商務實は商工務なり、前に公共的土木省を假に工務省と稱したれば、混淆を避けんが爲に、暫く單に商務といへど、省の原名は商工務省なり、而して其工務は一般の工業に關するものをいふ、此省大臣監督の下には、數多の會議所及諮問會あり、各州に在る技術及製造諮問會、商業會議所の如き即ち是れなり、而して其商業會議所の組織たる、單に商業上の諮問に備ふるに止まらず、會議所には所得あり、財産あり、圖書館あり、又商業技術等に關する學校補助等の制あり。此他佛國人の居留する海外數多の埠頭にも同會議所の設ありて、本省監理の下に置く。  
 尙ほ本省の所管に屬するものを擧ぐれば、一般商工業の發達に資せんが爲に彙集陳列せる技術及機械に關する豊富なる陳列館あり、技術及製造の中央學校あり、エキスザンプロヴァンス、アルセル、シャイロンの三技術及機械學校あり、



工業改善學校あり。

我今日の現制を觀れば、公共的土木事業の一分は内務省に屬するあり、一分は遞信省に屬するあり、就中遞信省に屬する鐵道事業の如きに至りては、同一省下に作業と監督とを兼掌するあり、體制事宜に於て兩つながら其可を見ず、國情にして之を許さば、工部の設置其れ必要にはあらざる歟。

### 國設諸制 三(陸軍)

陸軍 大臣は陸軍全體の軍政を掌るものなり。凡そ佛國に於ける兵役は佛國人一般の義務たるなり、其兵役年限は廿五箇年に亘れり、即三年間の常備十年間の豫備、六年間地方備、六年間の地方豫備是れなり。

佛の本國は十八軍團區に分たれ、每區に各一軍團あり、其第十九軍團は亞爾塞地方に配備せり。而して各軍團區を小別して、更に八旅團區を爲せり。

今其兵種及隊數を概舉すれば、

步兵 百四十五聯隊、要塞衛戍兵十八聯隊、獵歩兵十三大隊、山獵兵十七大隊、阿弗利加ゾアール兵四聯隊、撤兵四聯隊、阿弗利加輕歩兵五大隊、外國人兵二聯

隊、軍紀兵四中隊。

騎兵 胸甲騎兵十三聯隊、龍騎兵三十一聯隊、獵騎兵二十一聯隊、驃騎兵十四聯隊、阿弗利加獵騎兵六聯隊、突尼斯騎兵一聯隊、補充騎兵八中隊。

砲兵 十二中隊編制の師團砲兵十九聯隊、同中隊編制の軍團砲兵十九聯隊、山砲兵二十四中隊、歩砲兵四中隊、以上の砲數三千門以上に上れり、次に六中隊編制の要塞砲兵十六大隊、架橋砲兵二聯隊、修砲々兵三中隊。

工兵 土工兵四聯隊、鐵道工兵一聯隊、電信工兵一聯隊、技手工兵二十中隊、輜重工兵七十二中隊。

其他聯隊以外に在るものには、監督部軍吏及同屬技工あり、看護卒あり、馬丁あり、自轉車乗夫あり、參謀部秘書あり、又

廿七管區の憲兵あり、巴黎には共和護衛兵あり、消防隊あり。

尙ほ詳に之を謂へば、

税關兵あり、監林兵あり、近設にかゝれる使備兵あり。

更に地方備に見れば、



歩兵百四十五聯隊、騎兵百五十一中隊、砲兵十八聯隊あり。

總して平時の定員は、

士官及軍吏二萬八千名、下士及兵卒五十四萬四千名、軍馬及驛馬十四萬匹、野砲約三千門。

而して戰時の定員に至りては、實に、

三百萬を超越(最近正確の調査に據れば、三百七十八萬に上れり)

轉して陸軍管轄の學校を舉數すれば、ラフレージ、陸軍幼年學校、サン・シール士官學校、諸藝學校、フォンテーヌブローの砲工學校、ヴァンサンヌの軍政學校、軍醫及藥劑學校、陸軍高等學校、サン・メクサンの下士學校等あり。

以上陸軍の諸機關諸兵員を維持せんが爲に、佛國は年々歳入五分の一を撥供せり、其額實に六億法以上に達せり。

#### 國設諸制 四 (海軍)

海軍 大臣は軍艦軍港を管理し、海軍に關する一切の軍政を掌る。

現に佛國の有する艦艇を擧ぐれば、

甲鐵戰國艦、甲鐵巡洋艦、甲鐵海防艦、甲鐵砲艦を合し、甲鐵艦種に屬するもの六十餘隻、四十五萬餘噸。巡洋艦、水雷巡洋艦、報知艦、水雷報知艦、運送報知艦、砲艦及水雷母艦を合し、非甲鐵艦種に屬するもの百三十餘隻、二十七萬餘噸。各種の水雷艇を合し、三百餘隻、一萬七千餘噸。

其他四百噸以下の報知艦、水雷報知艦、砲艦を合し、六十餘隻、七千餘噸。運送艦及練習艦を合し、二十餘隻、約十萬噸に幾し。

即ち大小各種の艦艇を總計すれば、五百八十餘隻、八十四萬餘噸に上れり。

是等の艦艇たる、大小の艦隊及警備に充て、艦隊としては、西地中海及ルヴァン艦隊、北部艦隊、印度洋艦隊、太平洋艦隊、極東艦隊、大西洋艦隊、飛航艦隊等に分ち、其他警備艦として、イスタンブール、テイルヌーヴ、交趾、東京、カレドニー等に配置せり。而して以上の諸艦艇は本國三面の沿海に在るツィロン、ロシユ、フォル、ロリヤ、ン、プレスト、及セルプールの五軍港に於て、建造武装し、修理維持するに任じたり。

其海兵は編籍法に山りて徵集し、服役年限は二十箇年乃至二十五箇年間とし、



年齢五十歳に達するまでは召集せらるゝを得るものとす。若し其れ戦時に際すれば沿岸一帯の漁夫並商船の海員は皆動員の中に在り。其將校はフレスト軍港に定繋する練習艦ポルタの上に設けたる海軍兵學校に於て養成せらる。其他同軍港には若海兵學校あり、ポルドーには軍醫學校あり、巴黎には造船術學校あり、ツィロンには海軍高等學校等あり、海軍人員の總數は四萬に達す。其海軍歩兵及砲兵の數は尙ほ之に超加せり、即ち海軍歩兵十三聯隊、東京人、安南人、セネガル人、スーダン人より編制の同兵六聯隊、スーダン中のハウサ人及デエゴ、シユアレス人の同兵二大隊、海軍砲兵三十五中隊、海軍々紀一大隊、海軍及植民憲兵千三百名。

### 國設諸制 五(植民司法)

植民 部は久しく海軍に屬せしか、近ごろ獨立の一省となれり、省の大臣は植民地の長官を指彈し、之が行政を掌れり。但し主たる植民地中には内務の直轄に屬するものあり、植民會議の協賛を経て之が行政に任せり、其他印度支那の總督は自治權を有せり。

植民の政に對する本國の歳出は五千三百萬法とす(亞爾塞を除く)又植民地よりの國庫收入歳額は四千六百萬法とす(内二千二百萬法は交趾支那よりの收額なり)植民に關する學校としては、巴黎に植民學校あり、植民地派遣の官吏を養成する所とす。

佛國は由來殖民政略に拙かりと稱せらる、而も此植民の條下と陸海軍の條下とを併觀せば、亦其用意の在る所を知るに足らん。

司法 大臣たる者は、亦同時に掌櫃大臣を兼ね、其の司法に關しては、民事及刑事に分ち、高下大小諸裁判所の行政を掌る。

其裁判所を擧ぐれば、各郷には治安裁判所あり、各郡區には民事裁判所あり、十六都府には控訴裁判所あり。重罪に對しては各州に重罪裁判所あり、陪審に聽き之を裁判す。其最高の裁判所は巴黎に在り、之を大審院と爲す、此院は法律の至嚴なる解決に任ずるものなり。

按するに國璽なるものは國家の意思を實行するの顯證として用うるものなり、故に國務大臣の一人をして之を掌らしむるものは、則ち國璽を尊重す



る所以なり、今や本朝の國體は内大臣之を掌りて、内大臣は國務大臣に非ず、體制上豈闕くる所あらざる歟、識者の一考を乞ふ。

國設諸制 六(文部、教部)

文部 大臣は佛國諸學校の長官たり。其下に教育高等會議及大小視學ありて之を助く。

佛國は十六大學區に別たれ、各大學校長ありて之を統ふ。學校は大別して公立及私立と爲す、其私立學校に屬するものは、政府單に監視するのみ。

初等教育は國民の義務と爲し、必らず實行せしむ、其學校は亦公立と私立とあり、公立小學校は固より無月謝とす。初等教育中には高等小學あり、尋常小學を終りたる者を教育する所とす。

中等教育は専ら近世の學術文學等を教授するものとす(羅甸希臘等の古語に屬するものは固より之を除く)其生徒は男女ともに公私兩立中學校に於て之を教ふ、其私立中學の大分は概ね宗教學校に屬するものなり。

高等教育は文科、理科、法科、醫科の公立大學及高等藥劑學校並私立及特別學校に於て之を教ふ。其の巴黎に在る者は文科大學、理科大學、ソルボンヌのアカデミーにして、文理兩科大學は學生をして寄宿せしむ。

初等學校の教員たる者は、各州の初等師範學校に於て養成せられ、其初等師範學校の教員たる者はサンクルーの高等師範學校、フォントノイオー、ロースの同學校に於て養成せらる。中等教育の教員たる者は、文科理科兩大學、高等師範學校、セーザルの同學校に於て養成せらる。

其他特別學校として、ソルボンヌ專科應用學校あり、古典學校あり、東洋語學校あり、巴黎私立政治學々校あり、生理學々校あり、雅丁及羅馬學校あり。

又學術上の大建築物を擧ぐれば、無報酬にして高等の教育を與ふる佛蘭西コレージュあり、衆庶の攻究に資する博物學の博物館あり、巴黎緯度局あり、同天文臺あり、其他數多の天文臺及氣象臺等あり。

更に學者の團體に看到れば、先づ指を學士會院に屈せざるを得ず、同院には實に第一佛蘭西アカデミー、第二史學語學及古典學及美文學アカデミー、第三科



學、第四美術、第五道德及政治學のアカデミー、即ち都合五アカデミーの學者を網羅せり。

・凡そ是等一般教育の爲に供用せる文部の歳出は年一億六千萬法に上れり。

國の隆替する所以を究論すれば、歸は國民的教育の振と不振に在るのみ、國民の教育大に進みて、國の振はざる、我は信せず、文部の政其れ大に張らざる可けんや。聞くが如くなれば、近ごろ往々文部廢止論ありと、是れ法師を惡みて袈裟に及ぼすの論なり、今日の急務は袈裟を惡法師の肩より褫ひて、知識の肩に移すに在るのみ、袈裟果して何の罪かある、若し論者の論理に従はば、政府の吏僚多く國務を充たす能はずば、政府を廢して國を無政府の中に入るべしといふ歟、篤論に非ざるなり。

●教部 行政は常に文部に屬せり、但し其官衙は別に分立し、文部本省の外に在り。

・人民は全然信仰の自由を有せり。現に佛國には三箇の公認教あり、加特力教、布魯的斯丹教及猶太教とす。加特力教は佛國人の大多數を司配せるものな

り、大僧正十七人、僧正八十五人あり、佛國を大小區に別ちて、教化を掌れり、尙ほ其下に僧都及副僧都あり、各町村の間に住して教務に任せり。布魯的斯丹教の信徒は六十萬人、猶太教の信徒は五十萬人あり。其他回々教ありて、亦政府の保護金を享く、是れ主とし南方對岸の大植民地亞爾塞に行はるゝものなれば、其新附民教化の爲に之を助くるものなり、同地方の回教信徒は三百六十萬人に上れり。

國內には數多の壯大なる僧侶教校ありて、本國の教化に任すべき僧侶を養成せり。又海外派遣僧侶教校、サンテスアリ、同教校は並に巴黎に在り、阿弗利加派遣僧侶教校は里昂に在り、植民地の教化に任すべき僧侶を養成せり。又數多の教會、基督敎學校、僧友會、尼友會等ありて、古典に關する著述及教育の事に従事せり。

### 國設諸制 七(美術)

●美術 に関する行政も亦文部に隸せり、是れ亦分立の官衙ありて、文部本省の外に在り。



巴黎の美術學校は繪畫家、彫刻家、建築家、グラヴィールを養成する所とす。ルーヴル學校は美術に關する古典及歴史を教へ、音樂及唱歌館は音樂家及演劇家を養へり。尙ほ之が爲には羅馬に佛蘭西アカデミーを設置し、以上の兩學校を卒業し來る者を收めて此に入れ、其技を玉成せしむるあり。若し又各州に散在する此種の學校に看到れば、美術學校四、音樂學校十七及圖樣學校等あり。此他巴黎には妙齡なる女子の爲に設けたる裝飾術學校四、圖樣學校一、等あり。又有名なる製造品たるセーヴルの陶器、ゴフラン及ボーヴェーの花甕は、政府監督の下に在り。

轉して國立博物館の著名なるものを顧みれば、巴黎のルーヴル博物館は各種の美術品を一館に彙集し、豐富善美天下之に並ぶものあらず、威爾塞の歴史博物館は時代を追ひて古今の歴史を現示し、巴黎のクリニエー博物館は中古の遺物を拾收しサンセルマン博物館には查理曼大帝に至るまでの佛國の古物を網羅せり、其他巴黎のヤメー博物館は東洋に關する博物館にして、トロカデロ模型及人類兩博物館は彫刻建築と世界人類のそれなり。

若し又市府立博物館に看到れば、巴黎のカルナヴァレ博物館、巴黎府の沿革歴史に關するもの、カリエラ博物館あり、其他里昂、モンペリエ、リール、ナント等皆富贍なる博物館を有せり、而も以上は其著しきものを挙げたるのみ。是等の市府立博物館に對しても、政府は特に補助金を與ふ。更に有名なる大劇場を看れば、巴黎のオペラの如き、コメディー・フランセーズの如き、オペラ・コミックの如き、オデオンの如き、又ポルドー、里昂、モンペリエ、馬耳塞、リール、ルーアン、アンセル等に在る劇場の如き、亦た昔年々政府より補助金を受く。又一國の名譽なる歴史に關する紀念碑は、亦皆政府保護の下に在り。其數實に二千以上に上り、孰れの時代に對するものも、如何なる方式に關するものも、備はらずといふこと無し。(モニュマン假りに譯して紀念碑といふも、銅像あり、石柱あり、建築物あり、彫刻物あり、單に碑碣の類と誤る勿れ)

佛國が美術の獎勵に力を用ゆること其れ斯くの如し、彼が泰西の美術國と稱せらるゝ所以のもの、決して偶然に非ざるを知る可し。顧みて我國を視れば、亦夙に泰東美術國の稱あり、惟ふに吾人も亦自ら我國の藝術國たる可



き資質を有するとを疑はず、然れども今日までに開發せし我美術の美華は則ち如何、他が皎々たる月光の如くなるに比し、我は燭々たる螢火の如き感なからずや、是れ徒らに他の美に眩し他の美を稱するに非ず、我の國となりてに照し、又國の前途に視れば、自今我美術をして逸足して進み、稀突して馳せしめざる可からざる、必至の理由あるに非ずや。而して今の我美術に對する政は如何、在れども而も在らざるが如くならずや、斯くする所を以て斯く欲する所を求む、是れ所謂木に縁りて魚を求むるの類ならずや。

然れば自今一大獎勵の道而も濛々たる不息獎勵の道を求めざる可からず、而も是れ微力なる文部の得て任すべき所に非ず、已むこと無ければ、其れ皇室乎、皇室は實に名譽の源泉なり、善美の源泉なり、皇室よりして名實ともに之が獎勵を加へられなば、日本の美術は始めて此に革而一新せん、其方法は今ま得て言はず、我説若し探る可きあらば、朝野の君子願くば其道を講せよ。

### 私設諸制

佛國に於ける國設諸制の壯なる彼の如し、但だ其れ廣大なる一國の諸制は、國

家の獨力の能く任する所に非ず、由來久しく州會町村會ありて之を參助せしも、百般の新制は年を逐ひて益、設立の必要を促がすあり、是に於てか二十餘年以降私設の諸制勃然として興り、鬱然として榮え、國家の事業と相待ちて並行するには至りたり。

今ま其の著しきものを擧ぐれば、全國各地に射擊協會及體操協會ありて、強健にして堪能なる兵士を貢獻するの準備を爲し、養鳩協會ありて、傳書鳩の供給に資し、夫人協會ありて、戰時傷痍者の看護に任し、海濟協會ありて、水夫海兵の掖濟に勉む、斯くの如きは國家と相待ちて國防の舉を助くるものなり。更に放免罪囚に對しては、勸化協會あり、其れをして過を悔いて善に遷らしめ、業に就きて産を立てしめ、以て社會の安寧に資し、以て人類の罪惡を消さんことを勉む。

教育事業に關しては更に無數の協會あり、フランクレン協會の如き、初等教育協會の如き、教育聯合協會の如き、競技協會の如き、佛國少年協會の如き、其の最なるものにして、或は學生の勸學に資し、或は少年の競走を促がし、或は讀本の



惠與に任せり。

若し地理學に關する協會の如き、其數亦少からず、其の巴黎に在る一地學協會は、千八百二十一年の創立に係る、目下此種の協會は二十餘會の多きに達し、而して之が分會支社に至りては固より其外とす、是れ外に向ひて佛國の擴大を準備し、並に其舉の實行を補助するものなり。

又佛語同盟なるものあり、本部を巴黎に置き、佛國の植民地及各國に散在する同盟會と聯絡せり、是れ佛語を世界に播布し、佛國の政略及貿易の勢力を擴大するを以て目的と爲すものなり。

又阿弗利加探檢佛國協會あり、今日に至るまで關黒大陸に向ひ、業に已に派遣して莫大の利益を收めたる探檢者も亦其數少からず。

若し其れ慈善協會に至りては、實に其の無數なるを見る。中に就き貧民托宿院(貧困にして夜陰托宿するの屋なく資なき者に對し、無料托宿せしむる所の如き、麵包施與院の如き、棄兒院の如き、濟貧の制は、各州到る處在らざる無し。轉して職工に對する組織に視れば、各種の職業毎に之を保護する職業協會あり、其協會の領袖は、總えず之に關する社會問題の解決に勉めつゝあり。又其職業協會の側には、數多の經濟協會ありて、他の觀點より同問題の攻究に従事しつゝあり。尙ほ此種に屬する設制に視れば、生産に關する協會あり、消費に關する協會あり、信用に關する組合等ありて、經濟的原理の實行に任しつゝあり。

更に文學及技藝に關する諸協會を討ぬれば、演劇若くは音樂の表示會に任するあり、繪畫及彫刻の展覽會に勉むるあり。其他學者の集會に至りては、擧げて數ふ可からざるものなり。以て如何に私設諸制の月を追ひ日を逐ひて、富贍盛榮に赴くかを知る可し。

國の興隆優進する所以のものは、獨り國家それのみの力にあらず、人々國に奉し、個々國に盡し、國家と相待ちて其力を致すに由らざば、あらざ、ギゾーの



言なりしと覺ゆ、曾て東西の國となりて曰く、『亞細亞の諸邦には單だ一人の帝王あるも、歐羅巴の列國には實に無數の帝王あり』と蓋し歐洲の國民は人々自ら尊び自ら奮ひ、力を國に致すをいふなり、大言壯語といふと雖も、其中眞理なきに非ず、佛國の私設諸制に關し、熈々之を叙するもの、他山の石を拾ひて、聊か同胞に貢獻せんと欲するが爲のみ。

## 佛國の經濟

### 農業

佛蘭西は一箇の農業國なり、農業的民主國なり。全國到處地方の農民土地を分有し、以て農業に従事せり、其の然る所以を釋ねれば、大革命の惠に歸せざる可らず、何となれば大革命は封建的特權を廢棄したる後、町村の共有財産を住民に分與せしめ、同時に所謂國有財産を公賣せしめられたるなり。故に彼の大革命は實に人民に自由を享受せしめたるのみならず、併して之に土地を獲得せしめたり。今日佛國の農業的民主國たるを得たるものは、職として是れにこれ由れり。

佛國人の約三分の二は村落の間に住す、其數二千四百五十萬に上れり、尙ほ詳に之を言へば、人民の大半即ち一千八百萬以上は農民なり、其家族なり、及び其僕隸なり、中に就き四百八十三萬五千人は地主にして、又其十分の九は小地主なり、是等の小地主は實に土地の四分の三を有せり、大地主は殘れる三分の一



を有せるのみ、若し其れ小地主と大地主との數を比較せん乎、大地主は他の百分の一たるに過ぎず。

佛國の全面積は五千三百萬、エクタールあり（一エクタールは一町歩強に當れり）中に就き宅地、道路、荒蕪地、礮礮地等八百萬、エクタールを除き、其餘の四千五百萬、エクタールは悉く農産地とす。

其農産は大別して四種と爲し、第一は穀類にして、面積二千五百萬、エクタールあり、第二は葡萄園にして二百萬、エクタールあり、第三は森林及林野にして、九百萬、エクタールあり、第四は秣場及牧場にして、同じく九百萬、エクタールあり、斯くの如きは佛國の農業的區別なり。

### 農産物

穀類地二千五百萬、エクタール（一エクタールは我一町歩強）の中、一千六百萬、エクタール、即ち十分の六以上を穀産地とす、年々産穀の價額五十億法に上れり。之を過去に徴すれば、全國到る處に所謂休耕地の散在放置せらるゝありしが、現世紀の初葉より理化學の力に由りて肥料の改善を見るに至りたれば、此改

善肥料と輪轉耕作方とに籍し、漸次大に休耕地を減少せり、况や一方には各種の農具を發明すあり、他方には耕作の方法を改善すあり、是が爲に小麥の産額は當年に一倍するに至れり、即ち千八百十五年頃までは、小麥の産額年に四千萬、エクトリートルに過ぎざりしも、近二十餘年來は一億、エクトリートル以上に達せり（一エクトリートルは我五斗五升四合餘に當れり）

馬鈴薯の如き此國に移植せしより僅に百餘年、而も其收穫は今日一億二千五百萬、エクトリートルを算せり。野菜の如きは大都の近郊、マンス、海岸及太西洋岸一帯に於て之を栽培供給せり。

更に製造農産物に屬するものを擧ぐれば、一年の生山額十五億法に達せり。即ち

甜菜の如き一千八百四十年以降の播種に過ぎざるも、約六十年後の今日は大に繁殖し、就中北部は全産出四分の三を占め、收額毎年約一億五千萬、キンタルに及べり（一キンタルは百基魯に當れり）

其他製造農産物にして新陳代謝したるものを願れば、五十年來麻、及大麻、裘へ



て、綿之に代り。甘藍及其他の油質植物廢れて、橄欖油(プロヴァンス産)土荳類及石油等興り。茜類移りて油類より採製の染料に讓れり。之に反し由來政府の專賣に屬して、各地に播布し、就中ガロンヌの一帶に盛榮し、四十年來收額を一倍し來りたるものを烟草とす、即ち之が製造と販賣とに由り政府一歲の收額は實に三億法に上れり。

### 家畜、漁業

佛國に於ける家畜の生産は年々六十億法に上れり。就中馬匹の數は百年以來増加したること三分の一以上に及び、現數三百萬匹に達せり、殊にヘルシヨロ産は最も強健と稱せられ、所謂汗血の名馬を出す處なり、大宛、冀北に宛て視る可きは其れ此地方歟。加之英吉利種及亞拉比種を採りて改善に資せしより、馬種は一層の優進を見る、今日陸軍に用ゐる戰馬のみにも十三萬匹を數ふるに至れり。之に次ぎて驢、馬の數も亦少からず、是れ小農に取りては必要不可欠のものなればなり。驢馬に次ぎて其數多きは則ち騾、馬なり、ポワツトは其生産地と稱す、西班牙に輸出するものゝみにても巨額に上れり。

牡牛、鬮牛、牝牛の類も亦現世紀に入りて一倍し來り、現に一千三百五十萬匹に達せり。次にダルム種(ハム種)の輸入以來、羊種益改善せられ、二千二百萬匹を算するに至りしが、後半世紀に至り其繁殖稍減少に傾けり、是れ一つは耕方の進歩して荒蕪地の逐日墾畜せらるゝと、一は外國産の輸入多きを加ふるに由れり。但しメリノ一種の輸入に由りて乳羊は益改善し、食羊も亦益衍息せり。山羊の數も亦少からず、其數を算すれば、一百五十萬に上る。豚の數は六百萬、其他家鴨及雞の類も一大改善を経たり。又荒蕪地の面積日に削減して牧羊の數減少に向ひたる代りに、其地墾畜せられて、芳花芬草其上を掩ひ來りたれば、蜜蜂の飼養は益發達し、蜜の使用は砂糖を凌がんとするの勢あり。唯だ其れ年に減少し去るは野禽、山兎の類なる乎、是れ獵者の次第に増加し、殊に盜獵者の多きを加ふるに由りてなり。

河川の魚族も亦年を逐ひて減少し行くものあり、是に於て千八百五十二年アルザス州のユニングに魚族繁殖所の設置を見る、爾來各地に之が繁殖方を實施し、概近に至りては魚具復たび繁榮に向へり。今日沿海の漁船は一萬隻に



上り、漁夫の數は四萬六千に達し、遠洋の漁船も亦數千を算し、其漁夫も亦一萬三千に及べり、視て而して牡蠣の培養に至れば、アルタリーニの沿海一帯より、シラント及アルカシオン地方最も其盛を極む。

今日我國の最も後れたるものは馬匹の改善及繁殖に在り、我精銳なる歩砲兩兵に比して、騎兵に憾あるは職として是れに之れ由るには非ずや。且つ其れ宇内優勝劣敗を競ふ、身體の強健は日本國人の最先急務ならざらんや、而も其強健は食物の補養に資るもの多し、今日食肉の供給は富贍なりとするを得る歟、牛羊の繁殖亦忽にす可からず。但だ其れ食物の改善は一朝にして收む可からず、而して今日に至るまで吾人の最大榮養たるものは魚族に在り、村田水産の徒續起して益之が繁衍に勉めよや。

### 工業、鑛業

佛國は一大農業國たると同時に、亦一大工業國なり。其國民中男女を合し、一千萬以上は工業に従事せり。其工業の逐年如何に繁盛を加ふるかは、五十年來石炭の消費額十四倍に上り、

鐵の消費額十倍に達し、各種の織物三倍に超え、綿絲の織物六倍に至りたるに徴して知る可し。

佛國に於ける石炭の産額は、二千萬噸あり、

英國は一億六千萬噸、獨逸は七千三百萬噸、全歐洲に於て二億八千萬噸、米國は一億噸以上、

北部一帯、バド・カレールのみにて其半額を出せり、ロワール一帯の産出之に次ぐ。而して今や佛國の工業益、進み、國産の石炭のみにては其需用を充たすに足らず、一千万噸以上を年々隣國より輸入するには至れり。

之に次ぎて鐵の産額も亦尠からず、今ま一年の産額を概舉すれば、鑄鐵二百萬噸、鐵九十萬噸、鋼鐵五十萬噸に及べり、其産出地はムールト・エ・モーゼル州を以て最も爲す。

佛國は到る處大に地質を異にするを以て、各種の石類を産出せり、曰く花崗石、曰く鎔化石、曰く深紅石、白斑あるもの曰く石灰石、曰く水漉石、曰く燧石、曰く大理石、曰く白玉石、曰く板石、曰くサン・チマックスの陶土、曰くバド・カレールの石灰燐酸鹽



及結晶的山鹽等是なり。此他鑛泉を産する者亦少からず(有名なる飲料ウイシーの如き其一ならん)。又海鹽製造業は地中海岸の一帶大に盛なるを見る。

織物、衣服

毛絲、毛織、羅紗、天鵝絨、フランネル、メリノ、メリノ種羊毛を織交ぜたる布織物(カシミア、シル)等に用ゐて國人の熟知せる織物(タビー、敷物窓掛等室内の裝飾に用ゐる織物)等も亦佛國の名産たり、ルーベール(北部)、フルミー(同)、セダン(アルデンヌ州)、レンヌ(下セーヌ州)、エルブーフ(同)、ルーヴェン(エール州)、ヴェンヌ(イゼール州)、マザメー(タルン州)に於て之を産す。

看て絹織物に至れば精好巧緻夙に宇内に冠たる所、蓋し南部の大河ロームの一帶は桑田鬱茂し、到る處養蠶の地ならざる無く、繭を製し絲を抽きて第一の資料を供給す、之を滙聚受收して無比の好絹と爲し、佛國絹の名を天下に擅にせしむるものは即ち里昂及サンテチヤンヌとす、中に就き前者は専ら絹布を出し、後者は主として飾紐を産す、若し其の資料たる繭絲に至りては、國內の供給を以て足らず、年々之を伊太利、支那及我日本に取るもの擧げて數ふ可から

ず、是れ人々の夙に認知する所なり。

綿布の織物は佛國の專にする所に非ず、然れどもルーアン、リール、ローベール、カンテン、ミアンヌ、トロイ、フレール、ヴォーヌ、タラール、ロンヌ等は亦た盛に此種の織物を産出す、而して其資料たる綿花は主として之を北米合衆國に仰げり。但だ此綿布織製の一大中心たりしミルーズが、アルザス州と共に折れて獨逸に入りたるの一事、佛人の今に至るまで長嘆咨嗟する所なり。

次に麻布の製絲並織物に有名なる地は、リール及北部一帶にして大麻のそれに著名なる所は、マン及西部の一帶なり。笹縁の飾織を以て名を得たるは、ビュイ及カレーの一帶より、ノルマンディーの地方にして、繡箔を出すこと多きは東部の各地なり。婦人の帽子(即ちボンネット)はトロイ及巴黎の専長する所。

若し其れ男女の時服、各種の軍服、裁縫仕立、流行品、洗濯、染色、帽子、打紐、珍器の細工、タビー、化粧道具等の製品に至りては、到る處の都會にこれ無きはなく、就中巴黎は其最たり、若し尙ほおし擴けて之をいはゞ、時様の衣服珍器に對する巴



黎の製品は、獨り佛國に冠たるのみならず、同時に世界に冠たるべし、之を聞く、  
 毎○年○夏○季○に○際○し○米○國○人○の○巴○黎○に○來○遊○し○て○費○消○す○る○金○額○の○み○に○て○も○五○千○万○法  
 に○上○る○と○云○而○も○其○一○半○は○言○ふ○ま○で○も○な○く○其○精○好○巧○緻○な○る○衣○服○珍○器○の○買○物○に  
 消○す○も○の○な○る○を○知○る○可○し○。腰纏十萬緡、揚州の豪遊を思ふの人は、鶴に代へて  
 火輪に駕し、飛來りて其地に臨む、亦人生の一風流ならずとせんや。  
 凡そ佛國に於ける織物、衣服の産額は、年に二十八億法に上り、其輸出額は八億  
 四千萬法に達せり、從ひて之が原料等の輸入も亦尠からず、其額六億法に及ぶ  
 と云、故に其輸出額を控除し、約二十億法の織物衣服は、則ち自國人民の年々使  
 用する所なり、如何に富豪なる國民なる歟。

我國の養蠶に富めるは佛國に譲らず、我國人の手工に能なるは佛國人に超  
 えたり、若し其れ賃銀の廉なるに至りては、恐らく歐米に類なけん、此素を以  
 て此資を運らざば、佛人の席、一半を奪ひ去り、代りて之に坐すること、必らず  
 しも不可能事と爲さじ、國人之を思はずや。

### 艦船、兵器及機械の製造

ツィロン、プレスト、セルブール、ロリヤン及ロシニフォールの五軍港に於ける造  
 船所、ケリニーに於ける鋸及び鋸鎖の鑄造所、ルニエールに於ける大砲の製造所、  
 アンドレーに於ける機關、汽機及自動水雷の製造所等、國立に屬するものを除  
 き、其他の造船所及造兵所等を概擧すれば、  
 地中海、鑄鐵及造船所はツィロンの近傍なるセーヌと及アーブルに二箇所の  
 造船所を有し、其アーブル造船所に於ては、傍ら水雷艇をも製造せり。次にロ  
 ワール造船所はサンナゼールに造船所、サンドニーに機械製造所、ナントに造  
 船所及機械製造所を有し、且此ナントに於ては、是れ亦傍ら水雷艇をも製造せ  
 り。次にションド造船所はホルドーに造船所を有し。エムエム會社はツィ  
 ロンの近傍なるシオチーに造船所及機械製造所を有し。トランザトランテ  
 ク會社はサンナゼールに造船所及機械製造所を有し。ハルマン會社はアー  
 ナルに水雷艇製造所を有し。クルハゾー會社も亦シャール・シール・ソニー  
 に水雷艇製造所を有せり。  
 而して此クルハゾー會社はソーヌ・エ・ロワール州に在るものを本社とす、其本



色は實に鑄鐵及造兵に在り、其の如何に壯大なる事業を爲しつゝある乎は、長さ十二米突の大砲を鑄造し、厚さ五十珊知の甲鋼を鍛出し、重さ五萬基魯の大槌杵を以て如何なる頑鐵をも餅を搗くが如く搗碎くに視て知るべきなり。其他リールの近傍なるフイザに於ける、ロワール州のリーザド、シャエーに於ける、ガール州のアレーに於ける、及首府なる巴黎に於ける機關及機關車製造の如き。シャートルローに於けるサンデチャエヌに於ける兵器製造の如き、ピュイ・ド・ローム州のチェールに於ける刀劍鑄造の如き、亦皆佛國の名産ならざるなし。

佛國を以て英國に比すれば、海軍に於て商船に於て何れも第二の地位に在り、而も其公私の事業や彼の如し。如今東洋の英國は即ち如何、多くの軍艦、多くの商船、多くの鐵鋼、多くの彈藥を他國より購ひて、國の生活を維持する間は、一等の海國といふを得ん歟、保證す可き海國といふを得ん歟、王請ふ其本に反れ。

### 各種の製造

佛國の陶磁器は又夙に世界に知られたり、其の磁器(ポセリダ)の清水焼の如く純質なるものを出すの地はリモージュ、ヴェルゾン、ヌヴェル、ヴァロリー等に於て、就中セーヴルの磁器製造所は國立に係り、セーヴル焼の名は我國人にも亦知られたる所なり、次に陶器(ポセリダ)伊萬里燒等の如く稍、疎質なるものを産するの地は、巴黎、モントロー、クレイユ等と爲す。

一たび素人評を彼我の陶磁器に試みん乎、我清水焼の磁器の如き、膚純佳麗なるの點は、セーヴルに比して多く遜色を見ざれども、硬軟堅脆を比較し來れば、彼質は堅硬にして、此質は軟脆なるの憾あり、是を以て香非碗の如き香非皿の如き、初は喜びて之を迎へし者も、其の破碎し易きに懲りて、再び購はざるの傾あり、陶器に於ても亦然り、同一の材料と同一の分量とを用ゐ、今ま一段硬堅の性を加ふるの工夫なきや、當業の一顧を求む。

玻璃の製造も亦佛國の名産なり、炭礦地方の玻璃、燭類、ベッカラ、バンテン、里昂、馬耳塞、ホルドーの小玻璃器類、就中サンゴパンの玻璃板製造、恐らく歐洲に甲たらん。



時計の製造はブザンソン、ヌラの一帶及巴黎を推し、各種の家具、馬車及青銅器等は巴黎の専長する所。白蠟燭は巴黎及馬耳塞。石鹼は馬耳塞。香水は巴黎、グラスエ及ニース。手套は巴黎、グルノーブル。紙の製造はフングレーム、リゼール、エンソンス。技藝、學術、文學等に關する製作物、即ち圖書、彫鏤、寫眞、樂器及珍器等の製造は巴黎實に之が中心たり、其他新奇の意匠を出すの源泉も此に在り、人の巴黎を賞するも亦故なきに非ず。

### 商業

佛蘭西に於ける内國の商業を正確に統計せんことは、佛人も難しとする所、以上累篇列叙する所を以て、其梗概を察す可し。外國との商業に至りては、近六十年以降幾ど十倍し來りしを見る、即ち佛國が最も多く商業の關係を有するの國は、曰く英國、曰く白耳義、曰く獨逸、曰く米國、則ち是れなり。眼を列國の外國貿易に放てば、英國は第一位を占め、其額百七十億法、六十八億圓。獨逸は第二位に居り、其額九十四億法、三十七億六千萬圓。佛國は第三位

にして獨逸と伯仲の間に在り、其額九十億法、三十六億圓。米國は第四位、其額八十億法、三十二億圓。和蘭は第五位、其額五十億法、二十億圓。露西亞は第六位、其額四十億法、十六億圓。埃甸國は第七位、同じく四十億法。白耳義第八、其額三十億法、十二億圓。伊太利第九、其額二十三億法、九億二千萬圓。西班牙第十、其額十六億法、六億四千萬圓。瑞西第十一、其額十五億法、六億圓。

顧みて我國を視れば、明治二十九年の統計は、輸入の全額約三億一千万圓と、是れ蕺爾たる歐洲山間の一小共和國が脚板たるを望むも得べからざるものなり、二十世紀の世界に於て旭旗を四海に耀かさんと欲する者之を如何ぞ晏然たるを得んや。

### 交通

佛國が内外水陸の交通に勉めたる亦盛なりといふ可し、而も今に於て尙ほ之が改善伸長を實行して已まず、試に道路の統計を概舉せん。

所謂國道の延長、四萬、基魯、米、突、我一萬里、州道の延長亦幾ど四萬、基魯、同じく一萬里、其他の大道、十二萬、基魯、三萬里、町村間の道路、八萬、基魯、二萬里に及べり、是



れ皆坦々たる大道、駟車を駕して馳す可きもの。若し其れ村道に至りては四十萬基魯(十萬里)而も其半ばは尙ほ車馬を行る可きなり。故に之を統ぶれば好箇の道路四十八萬基魯、米突即ち我陸里十二萬里に達せり。是れ此延長たる桑港より新約克までの距離を幾ど百倍せしものなり。

更に内國の水路を視れば、千七百八十九年には運河の延長一千基魯、米突(我二百五十里)に過ぎざりしが、今日は五千基魯、千二百五十里に及び。船舶を行る可き河川は八千基魯(二千里)。小舸を行る可き川流は三千基魯(七百五十里)を算せり。斯くの如きは皆浚濬開掘の結果なり、然れども佛人は尙ほ以謂らく内國水路の交通は未だ所期の半ばに達せずと、是れ其の孜孜として尙ほ休まざる所なり。

轉して鐵道に看到れば、其の初めて之を敷設せしは千八百二十三年即ち今より七十六年前に過ぎず、國家の法制を立て、之を規定するに至りしは千八百四十一年即ち五十八年前の事のみ。近く千八百五十二年より五十五年に及び、巴黎を中心として、南は里昂及馬耳塞線成り、北部線、オルレアン線、南部線、東

部線、西部線皆成り、千八百七十七年即ち二十二年前に及び始めて悉く國有線と聯絡を全くするに及至れり。

今や鐵道線の延長は三萬九千基魯、米突、約我陸里一萬に幾く、又英里約三萬二百哩に幾し。

獨逸は四萬三千基魯、英國は三萬二千基魯、全歐は二百二十萬基魯、米國は二百八十二萬基魯。

佛國人は誇稱すらく、佛國鐵道の贅澤と鞏固とは以て乗客の愉快と安全とを保するに足ると、唯だ此兩因と兩縁は寧ろ獨逸に一舍を避くるものあり、然れども我國の鐵道に比する時は、佛人の誇稱を通過せしめざるを得ず、是れ亦當局に三省を乞ひたきところ。

電信の幹線は十萬基魯、米突、其支線に至りては幾ど三十萬基魯、米突に及べり。陸路の交通に係るものは斯くの如し、是れより更に海路に觀ん乎、佛國も亦他の歐米列國の如く、帆船年に減して、汽船月に増し來れり。千八百六十三年までは汽船の噸數は十萬噸に達せざりしが、今は即ち五十萬噸以上に及べり、之



に帆船の現數四十五萬噸を加ふれば總噸數九十五萬噸、船隻數一萬五千隻を算す、則ち之を歐洲の列國に比較すれば帆船は第八位に居り、汽船は第二位を占めたり。

沿海の航業と亞爾塞の交通とは佛國民の特權に歸せり、遠洋の航業に至りては自國の船舶は固より論なし、襟を披きて東西萬里の船を迎ふ。其の萬國交通の大埠頭は南に於て馬耳塞、年に六百五十萬噸の出入あり。北に於てル、ア、イ、ザ、ル、年亦三百五十萬噸を算す。其他ポ、ル、ド、ーは二百萬噸。ダ、ン、ケ、ル、クは百五十萬噸。ル、ー、ア、ン、サ、ン、チ、ゼ、ー、ル、カ、レ、ー、ヂ、エ、ツ、ブ、セ、ット、ブ、ー、ロ、ー、ニ、は百萬噸より百六十萬噸の間に在り。

國に道あれば則ち見はれ、國に道なければ則ち隠る、是れ豈獨り無形上のみならずや、有形上に於ても亦然り、日本をして富國たらしめ、強國たらしめ、海國たらしめ、弱國たらしむる、皆道に在り、道の政を執る者以て如何と爲す。

### 佛國の科學

凡例 學者名匠に關しては、其人の終始を概見するの必要あり、故に其姓名の下に注するに年代を以てす、例へば括弧を用ひ、ラ、ク、ラ、ン、シュ、(一七三六……一八一三)とするものは、耶穌紀元千七百三十六年に生れ、同千八百十三年に没したるを示すなり、其他は類推す可し。

#### 數 學

十八世紀に當り學術技藝勃然として興り、學者名匠を輩出せしと擧げて數ふ可らず、延きて以て大革命及拿破崙一世帝政の時代に及び、儼然として榮え、然として耀けり、之を學者名匠輩出の世とはいふ、有名なる技藝學校、師範學校、大學校、經度局及教育上に關する諸大建設の起りたるは、概ね此時に在り、就中科學の領土擴大皇張し來りしは此時に在り。伊太利及普魯西が争ひて招聘し、佛國より其人を奪ひ去らんと試みたるラ、ク、ラ、ン、シュ、(一七三六……一八一三)の如き『解剖的機械學』の著者にして、數學を一新し、有名なる米突組織を定めたり。モン、ツ、(一七四六……一八一八)は圖解總式幾何學の創造者にして、大砲製造の術



を改善し、埃及遠征の際には改羅府アノスチチーの長官たりき。有名なるカ、ル、バ、ー(一七五三—一八二三)の如きも亦手に共和國の軍を編成したるのみならず、其手を以て『トレイニヤ、ドワ、マフ、ア、ン、ス、ゼ、フ、ラ、ス、フ、カ、ル、ト』を草したり、是亦一大幾何學者たりき。天文學者ラ、ラ、ン、ド(一七三二—一八〇六)は『天文史』を著し。ラ、ブ、ラ、ス(一七四九—一八二七)はニュートンの學統傳承者なり、其著『エ、キ、ス、ト、ロ、ン、チ、ニ、シ、ス、ム、シ、ス、ル、シ、ス、ル、シ、ス、ル』に於て當時天文の知識を簡潔に概示したる後ち、更に驚く可き『天文機械論』を著せり、是れ此世紀に於ける大著述の一たるなり。是等の門下より出で、名を得たるは曰くコ、ー、シ、ー、曰くヂ、ア、メル、曰くミ、セル、シ、ス、ル、曰くエル、ミ、ト、曰くピ、ニ、ゾ、ー、曰くル、ヴ、リ、エ、ー、なり。ル、ヴ、リ、エ、ーは千八百四十六年其數理推測上の結果に於て、氏が指示せし天體の點に尙ほ未だ知られざる一遊星の存在す可きことを舉證せり、是に於てか、學者争ひて之が探究に努めしが、ル、ヴ、リ、エ、ーの説果して謬らず、終に海王星の發見とはなれり。フ、ー、コ、ー、ルは望遠鏡に改善を加へ、又千八百五十一年には時計の震揺上より試験を始めて、終に地球の私轉を目覩し得るに至らしめぬ。千八百六十八年にはマ、ン、ソ、ン、印度に赴きて日蝕觀

測を爲し、之に由りて群集せる星座の上に一の決定を與へたり。千八百七十二年には數學協會の創設あり。天文臺も亦此世紀に至りて各處に設置せられたり、中に就き巴黎の天文臺は千六百七十二年の創始にして、今に至りて二百二十七年を經、愈、益、完備し來り。プ、ザ、ン、ソ、ン、里昂、ホルド、ー、ツ、ー、ル、馬耳塞、亞爾塞の天文臺は、皆今世紀の國立に係れり。其他ニ、一、スにも亦一あり、是れ私設天文臺の始なり。

理 學

今世紀の前半に當り、理學者中其の最も見はれたる者を數ふれば、先づ指をケ、イ、リ、サ、ク(一七七八—一八五〇)に屈せざるを得ず、瓦斯に關する容積の法則を發明したるは此人なり、曲管晴雨計を發明したるも亦此人なり、此人の斯學に忠勇なりしは、一氣球に身を寄せて氣圍氣稀薄なる七千米突の碧落にまで騰昇したりし一事に視ても亦知る可し。フ、レ、ネ、ルは燈明臺に用ゆべき光力異常なる燭燈を工夫し、之を始めて試用せしは千八百二十七年なりき。若し其れ今世紀に入りて理學上最も進歩せしものを求めなば、則ち電氣に關するも



のならん。電話機及蘇言機等の發明せられたるも亦此世紀に在り、千八百二十年よりアムペール及アラゴは流電氣及磁石電氣に關する法則を發明し、終に電信機に應用す可き原則を定めたり。リムコルフは其名を冠せられたる捲機を創造し、巴黎に於て感染電流の一大實用を視るに至りしは千八百五十一年に在り。又マルセルデハレは千八百八十一年電線を用る、遠隔の地に電力を運輸することを試たり。

理學の一分たりし氣象學は、今世紀に入り全然たる一科學となれり、之が學祖となりし佛國人中最も有名なるはソーシュルなり、氏は元とマニエの一人なるも、佛國に來住し斯學を佛國に歸す。氣象學協會の創立せられしは、千八百五十三年に在り。次ぎて氣象中央局は巴黎に設立せられたり、爾りしより以來氣象臺は皆に巴黎に興されたるのみならず、ムードンに、ナントに、ベルビニヤンに、殊には佛蘭西富士なるピユイ・ドームの絶頂に、ピゴールの山嶺に、及び白山の高嶺にまで之を見るには至りたり、(佛國の現制中文部の下を參看せよ)

### 化學

科學の世界を四望すれば、バルクロー(一七五五—一八〇九)は『舍密哲學』の著者にして、其書は久しく世の憑賦する所なりき、此人は同時に大學の創立者なり、ベルトレー(一七四八—一八二二)は溶解性結晶物の講究に最も力を致し、終に其名を冠せられたる法則を發明するに至り、格魯爾の作用に由て洗濯を改善し、又火藥の製方を改善せり、此人は又埃及エンスチチー組織者の一人なりき。次にザークレン(一七六三—一八二九)はフォルクロワの門下より出で、灰色金(所謂格魯母)の發明者たり。其化學を執て工業及農業に應用し始たるは、則ちシ、アタル(一七五六—一八三三)なり、佛國に科學的製造品を供給し、共和軍に精良の火藥を受用せしめたるも此人にして、葡萄酒醸造の技術を一新せしめたるも亦此人なり、氏は實に實際的經濟家にして、又一大行政家なりき。尙ほ斯道に従ひて名を得たる者を擧ぐれば、テナル男(一七七七—一八五七)は種々の發明を爲したる中、箇拔爾士より美麗なる青色を抽出し、以て大に繪畫に幸せり。アンリ・セント・クレール、ドヴィール及アブレイは千八百五十四年アルミニウムなる一新金屬の用方を發明し、之を工業上に導きしより、今



日此金屬は甲鐵の鍛鍊上等に不可缺なる一要素となれり、而して此物は佛國の最も富む所なり。又ヂュマは舍密哲學の講義上に斯學の原則を概括せんことを試み、同時に諸要素の一致を指示したり、ウヰルツも又化學上種々の事業を爲し、其『化學字書』の如き最も世に行はる。

殊に斯學上今世紀に入りて一科學となりたるは則ち有機化學にあり、之が創立者の一人にはシユヴェルイユあり、此人は獸脂より所謂硬脂を抽出し、千八百十一年白色蠟燭を發明し、以て先人を薰灼したる有烟蠟燭に代らしめたり。

之を聞く有烟蠟燭を用ゐたる時代には、夜會晚餐の席上必らず剪燈の役に充てられたる者ありて、席上を周旋し、絶えず各燭の心を剪りたりと。東西の變遷も亦同しからずや。

シユヴェルイユは又染色を一新し、尺布寸片至珍と稱せらるゝ、ゴフランの織物に應用し、錦上華を加へたり。氏は一千七百八十六年に生れ、千八百九十年に没せり、百五歳の長壽を保ちて、畢生の事業を斯學に萃め、自ら謙して、書生中之最老生と稱せり、謙と雖も空言ならず、死に至るまで研究を怠らざりき、學者たるもの此概なかるべけんや。

最後に、パスツール(一八二二—一八九五)及、ペルトロー(一八二七)生を挙げん、二氏の名聲は微菌學によりて世界に隠れなきも、又皆化學の大家たり、即ち前者は酵母に就きて原理を發明し、後者は亞伯爾を發見せり、是に由りて砂糖、葡萄酒、麥酒、葡萄製各酒、酒精の製造上改善を加へたること擧げて言ふ可からず。

### 工業的發明

十九世紀に入り生活の資料に關し古來未曾有の變動を與へたるは、人々の善く知る所なり、殊に佛國に於て此平和的革命をなしたること多きを見る。印刷の事業に就きて著名なるは、グドローの一族なり、就中フルメンヂローは所謂紙型を發明し、一たび活版を紙型に印取すれば、恰も往昔の刻版を貯ふると一般の効能あり。又マリハニの輪轉印刷機出で、一時間能く萬枚以上を印刷す可し。此二つは本邦に於て誰れよりも先きに新聞社會の人々の熟知する所ならん、又機械によりて紙を製造することを創意したるは、エノンヌ製紙會社のルイ、ロベルト。



時計及電信の發達史上に其名を留む可きは、ブレグーの一族なり。ストラスブールの大教堂上に著名の時計を遺したる則ち、シヴァルケーにして、之が製造に五年を費したり。

セーゲル磁器製造所長たりしアレキサンデル・フロンニヤル(一七七〇：一八四七)は、玻璃器に繪くの術を復古し、且つ此人に由りて、陶磁器博物館の創立を見たり。リシヤル・ルノワル(一七六五：一八四〇)は、佛國に綿絲及羊毛の紡績及機械機械を導き、且つ之に改善を加へ。シャクカール(一七五二：一八三四)は、絹織機械を發明し。フリッポ・ド・シラール(一七七五：一八四五)は、麻絲紡績機械を創造せり。マチウ・ド・ドン・ペールが發明せし鋤及椀根採取機械の如き、亦農業に利せしこと甚からず。

千八百二十八年、ゼギンは、蒸機の使用上細管蒸罐の良好なる可きを按出し。ベルグールは、其名を冠せられたるベルグール水管蒸罐を發明せり、此水管蒸罐の價直は今日一世の海軍社會の齊しく認むる所にして、我國の新造諸艦亦た概ね之を採用せざるはあらず。尙ほ船艦に關しては、ノ・ハッブ・ド・マは、推進機

を發明せしが、同時同一の發明を爲す人ありて、先だちて實用せらるゝに至りしを見て、ソーヴァーッは、狂人となれり、孔子をして之を視せしめば、已むこと無ければ、即ち狂か、我はソに與みせんといはんか。

ダゲールが創めたる寫影術は、ダゲール及ニエッアの工夫に由り、一進して今の寫眞術となり、其寫眞術は今ヤリマン氏の發明を經、再進して有色寫眞術となるには至れり。

尙ほ詳に之を求めなば、今世紀に於ける佛國の工業的發明は、獨り此に止まらじ、今は單だ其一二を擧げたるのみ。抑、國の名譽は發明の多きに在りて、發明の多きは學者名匠を輩出するに在り、尙ほ進みて之を言へば、學者名匠を輩出するは、力を教育に用ゆるの多きに在り、推論し來れば、千流萬水皆教育の源泉に歸す、教育なる哉、教育なる哉、孟柯氏人に教へずや、淵に臨みて魚を羨まんより、退きて罟を結ぶに如かじと、國を思ふ者は、結罟に努めよ。

### 博物學

十九世紀は科學の世紀なり、其科學中世紀の魁を爲したるは、其れ博物學乎、何



となれば今百年佛國に於て長足の進歩を爲したるは、天然界の研究に在ればなり。其劈頭に見はれたる人を誰とか爲す、千八百零一年替者にして礦物學上の一大著述を爲したるブユイ其人なり、是れ佛國の塙保己一歟。アレキサンデル、ゾロンニヤルは新思想を以て千八百八年巴黎附近の地質を研究して一書を著はし。エリヴ、ド、ポ、モ、ン(一七九八—一八七四)は佛國の地質的地圖及地球の底下に於ける大破裂線に關する定論を興へ。ド、イ、ハ、レ、イは工學的探究を地質上に試みたり。

進化論をいへば人皆英のダーウソンを推す、然れども之を唱出したりしは佛國のラマルクとす、ダーウソンは即ち之を祖述し完成したるなり、而して新大陸の名が閉龍に由りて傳はらず、却てアメリカキヌの名を留めしが如く、進化論上にはラマルクの名を知る者少なし、其人は今に至り巴黎の植物園改造者の一人として聞ゆるのみ。地底草木の研究所は千八百三十七年に開設せらる、而して之を開設せしめしは則ちアドルフ、フ、ロン、ニヤルなり。千八百五十四年に至り、植物協會及慣土協會の設立あり、慣土協會の事は佛國の現制中私設諸制

の下に之を言ふ。植物學の研究は後半世紀に至りて最も盛なり、之が翹楚たる者は誰々ぞ、グ、ラ、テ、オ、レ、ー及ボ、ル、ベ、ル等を推さざるを得ず。

十九世紀の初に當り動物學に名を得たるは、曰くラセペード(一七五六—一八二五)是れ有名なるビュイフォンビュイフォンの傳統者として去今兩世紀の聯鎖たり。曰くエチエンヌ、ヌ、フ、ロ、ワ、セ、ン、ト、イ、レ、ール(一七七二—一八四四)。曰くキニヂイ、エ、ー(一七六九—一八三二)等即ち是れなり。キニヂイ、エ、ーは『地球變革論』の一大著述家たるのみならず、動物の分類を定め、比較解剖上より先世生物學なる一新科學を開きたり。魚類を講明したるは、ル、ウ、オ、ド、ワ、ア、ガ、シ、ー、ズ。海中動物の特別なる研究者は、アル、フ、オ、ン、ズ、ミ、ル、ヌ、エ、ド、ワ、ー、ル。人類學の研究はビュイフォン以來愈進み、動物學者の大分は概ね指を染めざる者あらず、而して専ら之に従事し、腦蓋の量に關し趣味ある意見を出したるは、ブ、ロ、カ、とす。若し其れ萬類一致論を唱出したるは、ク、ア、ト、ル、フ、ア、ー、シ、ユ、ナ、リ。而して人種學及人類學の協會は各處に興り、人種及人類の講究に従事せり。

生理學



生々の理と其神秘とを攻究する生理ビオロジの一科學たる、久しく醫術の一分に屬せしが、其の全然分離して獨立し一新科學となるに至りしもの、亦十九世紀の賜なり。加之此一新科學は醫術より分離して獨立したる後ち、却て醫療及製藥を啓沃し、他をして更に一新せしむるに至りたり。

斯學に關し今世紀に於ける佛國の學者を概舉せん乎、ブルイレン (一七九四：一八六七) は身體と精神の關係を攻究し、特に胎孕の理を明にし。クロイドベ ルナール (一八一三：一八七八) は「ヂャベツト」を世に知らしめ、又「キニラール」毒を試験して一器を發明し。邦人にも夙に其名を知られたる。ハスツール は化學的方法に由りて至微動物の探究に従事し、終に活纖維の酵母、腐性病の作因、傳染病の媒物たる至微動物の宇宙間到處に存在することを證明し、更に一步を進めて是等の「バシール」及「バクテリ」を攻究し、且つ之が兇熾を滅殺するの事業に進入し、最後に痘瘡に於ける種痘の如く、種毒免役の術を發明するには至れり。是れより以降、牝雞の虎烈拉、石炭の虎烈拉を併せ發見したるのみならず、千八百八十五年十月二十六日には、科學「アカデミー」に於て狂犬病の治療

法を公然明示するには至れり、是れ實に人間生々上の一大紀念日と謂はざる可らず、是に於て一の「エンスチチュ」は巴黎に國立せられ、世界の癡狂犬病者は皆巴黎に來り、並に斯術を習得せんと欲する世界の學者も亦た皆巴黎に來りたり。

凡そ十九世紀に著名なる佛國の醫家を舉數すれば、曰く「アルバーセイ」 (一七七二：一八三八) 此人は革命の際一兵卒より出で、終に「ヴァイルドグラー」の軍醫總長となれり。曰く「ラエニツク」 (一七八一：一八二六)。曰く「ビチル」 (一七四五：一八二六) 此人は精神病の治療方及癡狂原理の發明者なり。曰く「シルユ」 (一八二五：一八九三) 此人は非斯的里及非布諾斯の開拓者なり。若し其れ外科術に看到れば、曰く「ラレイ」 (一七六六：一八四二) 帝國時代に負傷者に對する勇敢なる庇護者にして、金創洗療方の創意者なり。曰く「ヂュピニト」 (一七七七：一八三五) 解剖博物館の創造者。曰く「ヴェルボ」 (一七九五：一八六七) 等即ち是れなり。其他負傷等の爲に知覺を喪失したる者の慣習を講究し、腐敗豫防方を改善したる等亦外科家諸氏の力に歸せざる可からず。



史學

十八世紀の特色は人物を輩出したるに在りしが十九世紀の名譽の一は各種の部に亘り人物を發見したるに在り其人物に就きて特色を會得したるに在り史學を一新したるに在り同時に地理學を一變したるに在り蓋し十九世紀に入來りて一新知識の光明は發したり抑此新知識の利器とする所は何物ぞ曰く解剖曰く批評曰く意象即ち是れなり此世紀の史家は以上の利器を杖つきて直ちに史源に溯り各手に寶玉を採獲し來りたり是に於てか史學は全然たる一學科となれり同時に最良なる一活術となれり本邦に慣用せらるる語を以て之を言へば此世紀に入りて史學は實に一の活學となれり

惟ふに佛國の大革命は一世を簸蕩し由來史學に大功ありしヘチデクテン派の耐忍なる講究をすら繼續するを得ざらしめたり。次ぎて帝國時代に至りては人好みて備忘録の類を草したるも多くは秘録にして知るを得ず今日に及び僅に其形影を見はすのみ。蓋し史學の今世に面して接近し來りたる初を顧みれば頗る抽象的なる文字の一種たるが如く觀せられたる間に在り是

れ則ち當時に至るまで年代記的なりし史體を一變するの端緒なりき。爾りしよりこのかた佛國に於て眞に史學の一新を見得るに至りしは全く近體文學の運行之が刺激を與へたると千八百二十一年古典學校の創立之が幫助を爲したるに由れり。

今ま斯史學の大家を概舉せん乎、オ、ギ、ヌ、テ、ン、チ、ユ、リ、(一七九五：一八五六)こそ實に新史學の創造者なれ其著には『諾耳曼人英國侵略史』あり、『メロヴェンヤン時代記』あり加之此人は多能なる一代の史家たりしと同時に講談家にして又畫家たりき。同時に有名なるギ、ソ、(一七八七：一八七四)は出で、哲學者として政事家として史學の問題を解釋し凡百の出來事を説明し併して其の然るを致し、所以の説を得ることを試みたり其著には『英國革命史』あり、又『文明史』あり所謂ギ、ソ、の文明史は則ち是れなり。此書や夙に我國に飛來し著者が豫想にだも上らざりし極東に於て其國の新史學を幫助せしことも亦尠なしとせじ。

ミ、シ、ン、レ、(一七九八：一八七四)に至りては、啻に今世の良史たるのみならず、亦



是れ一代の詩人にして、兼ねて先覺者たりしなり、謂ふところの身に識學才の三長を具へし者歟、其著『萬國史緒言』『羅馬共和政史』『今世史要』の如き、人々の前に豫見せざりし新地平線を開展せしものと謂ふ可く、又其『佛國史』の如き、一翰の鐵筆に佛國の鬚眉を發揮し、佛人の心目を喚起したり、佛人之を稱して佛國民の復活といふもの亦溢美に非ざる可し。之と同時に筆を並べて史界に馳驅せしはミニエー及チエールとす、ミニエー(一七九六—一八八四)は著名なる論理家にして、解剖を以て史眼となし、終に『佛國革命史』の大著あり、チエール(一七九七—一八七七)は即ち其史を續ぎたる者ともいふ可き乎、然れども此人の力を專にせしは『帝政史』に在り、氏は即ち之に由りて、コンシユラ時代及帝政時代の價直秩叙、光輝天職を發揚せり、加之氏の史業は獨り翰墨に寫し、ものに止まらず、其講義に於て顯彰せしもの亦一半に居らん、而して氏の名聲と政績史業は亦邦人の夙に聞見に入れる所なり。

若し尙ほ今世の名史家と其著を概舉すれば、グクトル、チヌー、リーの『羅馬史』に於ける。アンブリー、マルチンの『佛國史』に於ける。トング、ザールの『米國民政史』

於ける。ルナン、の『セミチック語史』に於ける。キチーの『革命史』に於ける。フニス、テル、ド、ク、ラン、ヌの『古都史』に於ける。テースの『今世佛國の本原』に於ける。皆一代の偉觀たり。

史學の原則一たび闡明するや、科を分ち業を定め、途を別ち鞭を揚ぐ。シヤムボ、リオンは千八百二十一年より埃及の形象文字を講究し、終に埃及史上に闇を破りたり、其他東方及極東の古文學に一指を染め始めたるも亦此人なり。又ルニエーは羅馬の碑碣考銘學を開き、ザイオ、レー、ル、チ、クは中世技藝の史學を定め、俱に古に替へて、今に徴し、今世の文明に資したる甚からず。

即今佛國の良史として其名最も中外に馳せたるは、曰くラムボ、イ、氏、曰くラ、ヴィ、ス、氏、曰くセイ、ニ、ボ、イ、氏と爲す、其のラ、ヴィ、ス、及ラムボ、イ、兩氏統督の下に編せられたる『萬國史』は、三世紀より今日に至る世界萬國の政史を囊括し、歴々掌を指さすが如し。

地理學も亦十九世紀に入りて、其面目を一變したり、今日大地及人類に關するエリ、ゼー、ル、ク、リ、イ、が大著述の如き、未だ之と比肩する者あらざるべし。



哲學

哲學に於ては、グットル・クレーゼン（一七九二—一八六七）の折衷說大に當初に行はれたり、而して此學派の研究方は偶、史學研究方の發動ともなりたるものあり、其故如何となれば、折衷派の期せし所は内外古今の哲學を講究し、之を一致せしむるに在りたればなり。爾後此學派の重なる代表たりし者は、フーコー、ワ、セイ、セー、ジョール、シモン、ル、ヌ、ン、グ、エー等なり。就中ジョール、シモン其人には邦人士の親炙せし者も尠からず。

然れども眞誠なる佛國哲學即ち懷疑說は、メ、イ、ヌ、ド、ピ、ランの首唱より再興せり。其の希臘哲學はラ、グ、エイ、ンに由りて一新復活し。獨逸哲學即ちケント哲學は上に見えたるル、ヌ、グ、エー亦之を導入せり、所謂新批評派なるものは即ち是れなり。

此傍に立ち、根本を人道の闡明に置き、敢て不可識的探究に入らず、講究を既知實在の境に限りて、一派の實在說を開きたるは、即ちオー、ギ、ヌ、スト、コント（一七九八—一八五七）なり、是れ正に孔子の教義と期せずして符を合するものあり、東

洋の語を以て其人に冠せば、則ち是れ亞聖の人なり。佛人にして此學を繼述したる者には、リ、ト、レ、ー（一八〇一—一八八一）あり、其著『實在哲學』は畢生の心力を注ぎしもの、但た此人は傍ら佛語一大紀念碑ともいふ可き『大字書』に勞し、其書大に行はれたるを以て、姓名却て此碑陰に掩はれたり。

今や佛國に於てコントの學說を憲章する人には、クリ、イ、君あり、ラ、フ、グ、ト、君あり、主張に異なる所あるも俱に實在說の翹楚たり。

社會學

社會學は今ま尙ほ少年の境に在り、從ひて社會學者と經濟學者との間には、論難常に絶ゆることあらず。

經濟學はジャン、バ、チ、スト、セイ及バス、チヤに至りて少しく面目を革新したり。蓋し社會學者には二派の對立するあり、一は共產派にして、他は個人派なり。其の甲派に在りては國家の權力の下に一切を分配し個人を專制せんことを主張する者にして、之が首唱者には千七百九十五年處刑せられたる叛徒バ、フ、イあり。同じく此派に屬すと雖も、フ、イ、リ、エ、ー（一七七二—一八二七）の如き



は稍、温和派ともいふ可く、意は共同組合フランスマンにあり。セ、ン、シ、モン(一七六〇…一八二五)は新基督教派の創立者にして、亦此派に属するも、一時の事に過ぎざりき。カ、ベ、ーが小説『イカリ旅行』は一時の耳目を聳動せし、是れ亦た一切の事相に國家をして干渉せしめんと欲するもの秘密派のピ、エ、ル、ル、ーは『人道』の著あり。ル、イ、ブ、ランは國立工場の主張者にして、大小の工場を悉く國有たらしめんと欲せし者なり。以上は皆な甲派に屬す乙派即ち個人派はブルードン(一八〇九…一八六五)より起りたり、是れ即ち國家制及所有制の大反對者にして、労働者自由組合の祖師なるなり。之を要するに社會學たる、今ま現に成熟の道途に在り一分の科學として成立するに至るには、尙ほ幾多の前程あらん。

## 佛國の文學

### 十九世紀初葉の文學

十八世紀に行はれたる佛國の舊文學は、延きて十九世紀の初葉に及び、革命時代の下に其末光を放ちたるは、燈火滅せんと欲して其の光を見るの類歟、次ぎて帝政時代の下に漸々衰微し、千八百二十年の比はひ復古時代(拿破崙一世の帝政廢止、ブルボン家の王政に復したる時代)に至りて、終に寂焉たり。我國に於ける王朝の追懷が維新の中興を孕胎し、古學の復興が明治の文學を權輿せしが如く、雅丁を追懷しては、デミスト、イ、ク、ルを想起し、斯巴爾多を追懷しては、レ、オ、ニ、ダ、スを喚起し、羅馬を追懷しては、カ、ト、ンを憶起し、來りたる十九世紀の佛國は、忽ちにして新共和政を産出し、又忽ちにして新文學を懷胎せり。此新文學の母たる希臘及羅馬の文學を、十九世紀の初に亘り代表したるは、僧都、テ、リ、ー、ユ、(一七三八…一八一三)なる乎、其が希臘の詩人、ヴ、イ、ル、ヨ、ールが古詩、ピ、オ、ル、タ、ンクに對する巧妙の翻譯は、如何に感動を一世に與へたる乎。是時に當



りて演劇も亦漸く富麗ならんとす若し當時マコロン政下の嚴狂的檢閲なく、帝政下及復古政下初期の脅迫的拘束なく自然の發達に任せしならば早く既に舊悲劇の籬籬を破り或は希臘の古詩人アリストファヌの好尚となり或は十八世紀特出のヂゾローが新案せし奇想的劇種の生出を見たりしならん。此間だ只だ一人の眞詩家あり之をアンドレー・セニエと爲す是れ千七百九十四年斷頭臺に上りし人而して其詩は二十餘年の後ち十九世紀の初葉に至りて始めて世に見はれたり。蓋し此人に尙ぶ所のものは名作の希臘古詩に沈潜し佛國の精神に默契せる感想を掬取し來り鎔冶化して名作を出しに在り其作『イヤムフ』の如き又刑前幾日鐵窓下の作『俘囚の少女』の如き今に至り人々の嘆稱措かざる所なり。

又此時代に於ける佛國の激動が産出したる鉅篇ありル・セ・ド・リールが手に成りたる『マルセイエーズ』マリ・マゼフ・セニエが腕を振ひたる『出陣の歌』は即ち是れなり是れ實に眞中の眞詩大中の大歌とも謂ふ可き乎而して此眞詩大歌の由りて來る所を顧みれば古ヘメセニの第二戦に當り慷慨悲歌

して斯巴爾多人の勇氣を其骨頭より喚起したる雅丁の詩人チールテールが軍歌に淵源せざるはあらず。

又十九世紀の最初に當り言論の自由政事上に公認せらるゝや佛國が久しく忘れ居たる政事的辯論は春草の地より抽づるが如く茁然として復た發し議會の高壇上にゴール人種固有の洪聲雲を破りて迸發するに至りたり。見よ千七百九十三年刀下に首を授けたるシャロンアン黨のバルナイズ及ヴェルオの如き身を挺して其後を承けたるダントンの如き立憲議會の下に出でたる代議士モリリ、僧都の如き一世の雄辯家に非ざるは無く是等の數士が雄壯の音大膽の辯は音に佛國を衝動したるのみならず并して全歐洲を刺激し人をして燃ゆるが如き情念と勇氣を雷發せしめしもの擧げて言ふ可からず。中に就き其の最雄最大天下に無比なりしは即ち彼のミラボ（一七四七…一七九一）とす君が當る可からざる動作と雷霆の如き聲とを以てして千載一遇の機に會し議會の高壇に絶叫せし辯論の下に國民的意思を宣揚せしもの其れ以て如何と爲すや人の稱して以てデモステイヌの再來と爲すもの決



して溢美に非ざるなり。

拿破崙一世の天下に最第一の文豪は誰とか爲すや、問ふまでも無く拿破崙一世其人なり、失寵擯斥の憂もなく放逐遠謫の虞もなく、言はんと欲する所を言ひ、記せんと欲する所を記するの自由を己れ一身のみに有せし拿破崙一世其人なり、此新該撒が兵事の演説若くは勝戦の布告を載せたる『ユルマンテール』を讀む者は誰か之れに首肯せざらんや。

是時に當りて帝威赫々として烈日の天に繋れるが如く、國國聲を收めて皆緘黙を守りたれば、文學の看る可きもの幾んど罕なり、其の間だ一世を除きて世に聞えしは帝の左右に在りて、或は公文に或は私乘に文名を擅にせし一のフアンターヌありしのみ。然れども文運既に地底に生ず、豈迸出の秋なからんや、其の初は潜運黙移し、心を以て心に傳へ、頭よりして頭に移し、も、尙ほ時に思想の作者マリエーベの如きありて深長思想を掩はず。既にして文豪の體を接して輩出し、昂然として帝政の前に抗立し、其の天真を發するあり、萬鈞の繩輓ありと雖も、如何ぞ之れを維ぐを得んや、蔚然たる新思想の一著述は集權政

下の中央を離れ、外國に於て現出したり。

### 近體文學の起源

千八百二十年より五十年の比はひままでに爛々たる美華を發したる近體文學は、之れを佛國天才の再生とも謂ふ可き歟、然れども是れ發するの日に發せしに非らず、其樹の地中に根ざし、其の華の枝頭に含まれしは實に十八世紀に在り。彼のシャン・ジャック、ルソーが滿腔の感慨を以て熱情を以て、歡喜を以て、悲想を以て、當時に至るまで埋没せし自然なる者を擢揮したるは取りも直さず近體文學には非らずや。彼のベルナルデン、サンビエールが醉えるが如く狂せるが如き爛熳たる天真を以て、其著『今世』に現象したる風景は亦た近體文學の一因には非らずや。殊に近體文學なる名稱をさへ唱出し來りしはチャケルの女にして拿破崙の敵なりし、傲慢自尊のマダム・ド・スタエル、女史(二七六六……一八一七)に在り、女史は其著『日耳曼』に於て、シルレル及ゲーテの名作を祖述し、カント及フィテの意象説を憲章せり、一言にして之れを蔽へば、北獨逸に燦爛たりし北詩の精華を摘贈せり。



之を聞く、一日盛宴あり、一時の美人と名流と皆悉く此に聚まり、春殿花の如きの觀あり、スタエル女史亦衆中に在り、會々拿破崙の來り臨むや、女史の自尊は自ら抑えず、進みて帝に謂て曰く、此衆媛群姬の裏、知らず君王は誰をか愛敬すや、皇帝人となり固より眞率、毫も世辭を女流に用ゐず、聲に應じて答へて曰く、我は最も驕矜自ら高ぶれる者を憎むなりと、女史慙恚其生を畢るまで帝の敵となれり。

此時代に際し、一代の喜びし所は、英の古詩人オスシヤンの悲歌、古代セルトの英傑を歌ひし『バルド』の類なりき、願ふ之を喜びたる一代の人自からも、其喜びたる所以を知る者尠かりしならん、然れども是れ亦舊文學の爛熟を厭ひて新文學の到來を招歌するの聲に非らずばあらじ。

最終に、シャトリアン(一七六八—一八四八)見はれ、千鈞の力を近體文學の起源に與へたり。蓋しシャトリアンが文章の富麗綺麗なるは固とより論なく、尙ほ其餘力を奮ひて佛國的詩歌及基督教的詩歌迄を一新せんと試みにき、之れを喩へなば猶ほ韓昌黎の詩文に於けるがごとけん歟、其文八代の衰を

起し、のみならず、詩も亦唐宋二代に亘り、六家の一たるを失はざりしに似たるものあり、願ふに彼が『基督教の天才』(一八〇二)を著はすに當りては、尙ほ拿破崙が第一、コンシユール時代の基督教政略を指導せんと欲せしもの、如し、然れども古今の二傲骨たる彼の兵卒と、此の記者とは、到底調和し兩立すること能はざりき。

シャトリアンの眼中には唯だ己と神ありしのみ故に口を開けば我といひ、寰宇に對すれば神と呼びき、曰く我は之れを許さず、曰く神は之を命したりの類比々皆是れ。曾て人あり、シャトリアンと語り、陛下然か宣ひきといひたるに、シャトリアン之を尤めて曰く、陛下とは誰をか指す、彼、ポナバルト君の謂なる乎と、拿破崙一世の世を終るまで之と對話し、又書を寄するにも必らずポナバルト君と云ひ、未だ付て皇帝陛下等の語と字を用ひしことあらざりしと云、其人となり亦以て想見すべからずや。

シャトリアン既に拿破崙と相容れず、是に於てか佛國を離れ遠く域外に遊べり、千八百二年には『マルチール』の著あり、歴史的小説體に由りて、多神教に對



する基督教信仰の捷利を述べ。又千八百十一年には『セリ・ザレムに於ける  
 巴黎の道路』を公にし、俱に一世の耳目を聳動せり、其の米國に遊びては『アタラ』  
 の著あり、米國當時の未開なる寂寥を觀察して、妙神に入り。又『ルネー』を著は  
 して、不幸なる癖好の懺悔を説けり。此最後の二名作こそ短文小説の權輿と  
 やいはん。

尙ほ此近體文學の起源に關し、一人の記せざる可からざる者あり、*マストル*、*マ  
 ストル*（一七五四—一八二一）は即ち是れなり、其著『法皇及聖彼得堡の夜會』は千  
 八百十九年及二十一年に公にせられ、鬱勃たる熱情を注ぎて、共和的思想を攻  
 撃し、矯激なる詭辯を振ひて、社會的新秩序を鞭撻せり。當時*マストル*を評せ  
 し語あり『王政黨として王よりも王權家なり、皇政黨として教皇よりも教權家  
 なり』と此熱血あり、文名を後世に垂れたる所以ならん。

二大文豪上

佛國の二大文豪といへば、人皆其の*ラマルチーヌ*及*ヴィクトル・ユゴー*たる  
 ことを知らん、謂ふ所の佛國近體文學なるもの此二大家に至りて大に備はれ

り、蓋し二氏が世體と事物と人情とより掬取したる特得の感想と、古今を空く  
 せる用語の自在とに由り、運らすに韻文を驅使するの大膽を以てし、天上地下  
 の神秘を發掘するにあり、是に於てか佛國は始て優美高雅にして、瑟瑟に和し  
 歌ふべき新詩あるを知れり。

千八百二十年ラマルチーヌが『メヂタシオン』の世に公にせらるゝや、一世の驚嘆  
 異常也。人皆以て曉日海を出づると爲す。次ぎて『新メヂタシオン』（一八二三）  
 『詩の和聲』（一八二九）出で、其詩其人と益々天下に耀けり。惟ふに人の思想なる  
 ものは一定不變のものに非らず、初めラマルチーヌは王政主義なりしが、後ち  
 に熱心なる民政主義の人となれり、君が洒脱なる近東の遊遊前後に於て、忽然  
 其人を分つ可きものあり。後ちに『*マクレン*』及『*マロンテン*』史の著あり、  
 等しく詩體を用ゆ、亦皆一代の傑作たるを失はず。唯だ其れ禍福は絆へる細  
 の如く、榮枯は測る可からざるものあり、千八百四十八年拿破崙三世の佛國に  
 大統領たるに及び、直ちに野心家の心を指し、是れ第二帝國出現の徴なりと叫  
 びて禍を買ひ、帝政仆廢の一年前千八百六十九年轆轤不遇の間に没せり。



之を聞く、ラマルチーヌの人となり、亦傲岸自尊にして人に下らず、其の始めて議員に上るや、各黨争ひて之を延かんとするも就かず、一日議場に出づ、人其の何れの黨派に屬せんと欲するやを問ふ、ラマルチーヌ手を揚げ、屋上を指さして曰く、我は天井黨なるのみ」と、意は五百議員の上に在りて、之を指麾せんと欲するに在りしなり、是を以て議員の生活を了るまで常に獨立の地位を占め、別に異彩を放ちたりと、君の人となり亦以て察す可し。其の屋場の演壇に立ち、自家の意見を演べ、若くは他の辯難を駁するに當りては、言々粲然として文を爲し、語々斐然として章を爲す、是を以て君が辯論の官報新聞に出づる毎に先を争ひて之を購讀したりと云ふ、君が如きは謂ふ所の天才なるもの歟、君は亦瀟灑にして豪奢を好み、其の東遊の行の如き、萬鎰を揮ひて逸興に資したりしと、其著『東方の縦遊』を讀む者は以て當時を追想す可し。是れ恰も太白が玄宗賜ふ所の黄金三十萬を腰にして山東に遊び、一揮之を盡したるに似たるものあり、胸間光風霽月を懸けたる者に非らざれば、何を以て此に至らんや、其の最後の各失意に了りたるが如きも亦彼れ

是れ相似たり、由來光明の士は其運命を同くするある歟。

又聞くラマルチーヌの歿後、ユーゴの著一世を風靡し、ラマルチーヌの詩作、一時其蔭に掩はれたるの觀あり、然れどもラマルチーヌが深遠の詩想は、寧ろユーゴに優れるものあり、輒近に至るに及びて後者の聲價漸く減して、其分量再び前者に歸せんとするものありと云、是に至りてラマルチーヌは少陵に肖て、ユーゴ却て太白に幾きものあり、代は二十世紀に入りて、論乃ち定まらんのみ。

### 二大文豪下

ダクトル、ユーゴは其れ詩聖なる歟、千八百二十二年其大作『オード』及『バルラード』を出したる時は春秋僅に二十歳に過ぎず、而も其聲名早く已に掩ふ可からざるものありき。蓋しユーゴの一生は名譽を以て終始せしものと謂ふ可し、學校に在りては何時も諸生に冠たり、學校を出で、よりは常に社會に推され、生きては『十九世紀の文王』と尊稱せられ、死してはバンテオンに國葬せらる(一八八五)文士ありてより以來未だユーゴの如く盛なる者はあらじ。



千八百八十五年翁の笈を易うるや、一世の嘆惜異常なり、佛國は即ち國士の禮を以て、ルーソー及ガムベッタ等の諸名士を葬りたるパンテオンの國葬院に葬れり、葬るに先つと三日柩を擧げて佛國の國譽を表彰せる凱旋門下に駐む、内外の人之を傳聞し來りて別を柩前に惜む者二百萬人に上り、葬を行ふの日靈鳩を放つと六萬に及び、巴黎の天地物影一時雲の如くなりしと云。總して翁の諸作たる洪大なり、滑稽種を除くの外は、指を染めざる所なく、就中節奏有韻の詩に至りては、實に第一の地位を占む。其少壯間の名作には『東方あり』、『秋の木の葉あり』、『黄昏の歌あり』、『箇中の聲あり』、『光と影あり』(一八二九)、『一八四〇』。五十歳後帝政に抗して放逐せられたる間の名作には『默想あり』、『世々の古傳あり』(一八五六)、『一八九五』是れ皆以上の詩體に屬するものなり

又た翁が天賦の韻文を以つて筆を下したる院本には『エルマニーあり』、『マリオンテロルムあり』、『ル・ロワ・サミューズあり』、『リュクレス・ポルシャヤあり』、『マリー・チュードールあり』、『ラ・エイ・ブラあり』、『ビュルクラーザあり』(一八三〇)、『一八四三』是

等の諸作相次きて見はるゝや、舊悲劇派は極力之れに反對したれども、螻蛄の百斧悉く一の隆車に挫かれたり。又た此間に於て翁は有名なる歴史的小説の著あり、『ノートル・ダム・ド・パリ』は即ち是れなり。若し夫れ翁が惻怛の至情を以て、社會の窮苦無告の爲めに新想を瀝注したる小説には、『ミゼラブルあり』、『海の労働者あり』是れ千八百六十二年より同六年に至る間の著なり。是等の著作が人間の天良を刺衝して、人道に裨益したる効は決して鮮少なからざる可し。

今ま其れ翁が思想の變遷を顧みれば、亦ラマルチエに肖たるものあり、少壯の比ほひは王黨の一人なりしが、旋りて拿破崙の名譽を謳歌するの人となり、終に自由主義に改宗するにに至りたり。路易布立夫の佛國王たるや、擧げられて上院議員となり、千八百四十八年には立憲議會に入り、得意の快辯を振ひたりしが、同五十一年十二月二日の變あり、拿破崙三世の爲めに放逐せられ、久しくゼルセーに隱遁したりしが、此に在りて夫の痛快なる諷詩『懲責』を作り、彼れ該撒宗の英雄に報復する所あり、誰か文士の筆硯、劍戟に當らずといふや。



三世敗れて共和に復するや、翁乃ち巴黎に歸り、不朽の名譽を負ひて此京に終り。

近體派

十九世紀に於ける近體文學の系統を概言すれば、其先覺にはカマミル、ド、ラ、ヴ、イ、ニ、(一七九三)一八四三あり、其著「メ、ス、シ、ニ、ヤ、ン、ヌ」は「ア、イ、テ、ル、ロ、イ」大戦の翌日を詠し、佛國の國譽を墜とさしめず。之と前後して、ベ、ラン、ゼ、(一七八〇)一八五七あり、短篇といふと雖も數多の著作あり、詩體を以て國譽愛國心及自由を頌出し、最も世に見はれたり。而して「ラ、マル、チ、イ、ヌ」及「ウ、イ、ク、ト、ル、ユ、イ、ゴ」に至り、古今の衆美を集めたり。

「ア、ル、フ、レ、イ、ド、ミ、ヌ、ス、セ」(一八一〇)一八五七も亦近體派の大家たり、其大膽奇矯の著「西班牙及伊太利の傳説」の如き、其絶望浩嘆の作「世紀の一見が悔恨」の如き、就中世人を感動せしと最深き「五月の夜」及「十月の夜」の如き詩形詩想とも、に近體文學の進善に與りて力多し。又「ア、ル、フ、レ、イ、ド、ウ、イ、ニ」(一七九七)一八六三あり、此人は道德及び哲學の思想を執り、之を近體文學に鎔冶し、化して新

詩に出さんと欲し、意匠慘澹工夫を凝らすこと多年、是を以て其初め久しく世に見はれざりしが、「古詩及今詩」の著出で、頃より漸く名譽あり、終に此種の詩に於ては近世詩家の翹楚となれり、此の他若干の院本及歴史的小説の著あり、「センク・マルス」の如き「從僕と軍備の洪大」の如き、最も世に行はる。又「セン、ト、ブ、イ、ヴ」(一八〇四)一八六九は初め久しく主觀的詩人たりしが、後には客觀的詩家となりて、人心なるもの、客觀に力め批評を創めたる中の一人となれり。又「オ、イ、ギ、ヌ、ト、バ、ル、ビ、エ」(一八〇五)一八八二といふ人あり、「イヤム、フ」なる嚴厲なる諷詩を著し、千八百三十年に於ける平民議會の卑屈を嘲刺せり。其他「ブリ、ズ」(一八〇六)一八五八は微辭の短詩を出して「アルターニ、ユ、及アルトン人」を詠し、「テ、オ、フ、イ、ル、ゴ、イ、チ、エ」(一八〇八)一八七二に至りては句の配合に獨得の技を有し、「エ、モ、ー、エ、カ、メ」の作あり、此人は近體の詩に關し、用語及音韻の區域を最後の地まで進捗せしめたり、但だ此人は等しく近體派に屬すと雖も、此の種の諸家が近三十年來詩想の主神とし奉持したる、我の成式を一擲し、是れより以外別に非人的詩あることを發見し、自然を主とす



可きことを唱出したたり。嗟、是れ自然派出現の天使歟。

### 自然派

若し夫れ、自然派なる名目を掲げ來りなば、千八百五十年の比ほひより、首を昂げ來りたる新派の詩家は、概ね自然派に非らざる無けん。而も是れ詩に於て、獨り然るのみならず、小説に於ても、繪畫に於ても、彫刻に於ても、亦皆自然派に傾向し來らざるはあらず。

今ま此の自然派詩家の系統を畧叙せん乎、テオドール・ド・バン・ゲール(一八二三—一八九一)は自然派中一派の泰斗たり、其著『人像塔』『鐘乳石』『踏細師の歌』あり、又此自然派中最悲的、最慘的、好みて遭難、遭害、瀕死、死等を寫出する派なるものには、ボードレー(一八二一—一八六七)あり、其著『害惡の花』は戰栗す可き害惡の畫句するを極言せり。又た自然正派の中には、ルイ・ブイレー(一八二二—一八六九)を數へざるを得ず、其著『地中の發檢物』は天地開闢の真相を説明せんと試みたり。若し夫れ自然派中第一の大家を問はば、即ちルコント・ド・リール(一八一八—一八九五)なり、其著『古詩』『戀詩』及『悲詩』の相次ぎて世に出づるや、

其詩形の富贍一致と、其色彩の煥乎燦爛たるを、善く文學の正宗に歸し、又善く其幽玄を發したり。又感情の微妙なる解剖家、哲學的の吸睛家には、現にシ、イ、リ、ア、フ、リ、ム、ド、ム、氏あり。フ、ラン、ソ、ワ、コ、ン、バ、ヘ、イ、あり。就中後者の著作は最新の思想を發暢して餘りあり。今や此自然派中最近に發生せし者には、零落派と稱する者あり、微證派と稱する者あり、前者は零落の萌芽を捕へ、後者は事物の微證を捉へて、更らに新面目を開かんと勉めつゝあり。最後に革新派を擧げん乎、此派中にも知名の作家尠からず、而も其の最も著れたるは、ヴ、ル、レ、イ、ヌ、(一八四四—一八九五)ならざる無からんや。

### 小説

小説の盛なる、又其種類の夥しき古より未だ十九世紀の如きはあらず、従ひて名家を輩出したる、亦擧げて數ふ可からざるものあり、例へばベルナルデン・ド・サン・ピエールの如き、シャトリアンヤンの如き、ウイクトル・ユゴーの如き、アルフレ・ド・ヴィニエの如き、其著作の方面より視れば、皆一代の名小説家ならざる無し、然れども是等諸氏の著作たる、寧ろ其緒餘に出でたるもの、故に本篇を叙する



に當りては、暫く此の種の諸家を除き、専ら小説を以て家をなしたる人々に限らざる可からず。

其の小説の專家として最も早く見はれたるは、バルザック(一七九九—一八五〇)なり、著作に従事せしこと二十餘年、一日の如く、其氣力の旺盛なる、世の嘆稱する所、夫の『ユーゼニエー、グランデー』の著の如き、最も其傑作とし推さる、從ひて永く忘る可からざる一體を小説界に開きたり、但だ此自然派の現實家が擇取せし所は、好みて倫理上の醜惡を描寫するに在り、後世ゾラの一輩を出したる其備を作したるもの無からんや。アレキサンドル・デュマ(一八〇三—一八七〇)は快活なる物語家として、驚く可き冒險者の作家として、一種の奇思想家として、夙に邦人にも其名を知らる、此人の主として擇びし所は、根據を歴史に取り、又有り得べき事實に取り、自由を發揮するに在りき、其著『コムト・ド・モント・クリスト』の如き、『三銃卒』の如き、幾んど之を知らざる者なく、最も人口に膾炙せり、是れ亦小説一體の開祖なり。又縱横自在の靈筆を有し、三四體の名作を一手に出したる作家としては、ゾラ、ルマサン、女史(一八〇四—一八七六)を推さざる可

からず、妙齡を描き、情慾を寫し、流暢にして、有韻なる一體の著としては、『インヂヤナ』あり、『ヴァランチエーヌ』あり、歴史的小説の種類としては、『モーブラ』あり、社會主義と宗教主義との論難に關する作としては、『コンシエロ』あり、山河自然の景象に對する感情を見はしたる著作には、『フランソワ・ル・シヤムプリー』あり、『鬼』の『池』あり、『ブチット・ファデット』あり、『鐘撞く主』あり、加之女史の翰墨は、晩年に至りて益々妙境に入り、更に淡泊水の如く、而も醇乎として醇粹なる一體を創始せり、『マルキード・ヴァイルメー』の如きは、其一なり、其巧思才藻亦驚く可からずや。

アレキサンドル・デュマ去りてより後ち、冒險的小説日に正路を失ひて、邪徑に陥いり、凡そ此種の小説としいへば、小新聞の下欄に於てするより外は、多く看る可からざるに至れり。然りと雖も名家の子に名家を出し、小デュマ(一八二四—一八九五)復た興りて悲詩的の著『山茶花女』あり、又、メリメー(一八三〇—一八七〇)の正經なる作に、『コロムバ』あり。フロベール(一八二二—一八八〇)の柝微なる篇に、『マダム・ボヴァリー』及『サラムボ』あり。以上の三家は故バルザック



クが開創せし現實小説の非人的性格を發掘し、並してサン女史が述作せし同小説の自然的妙趣を玩味せしめたり。爾りしより以來、ゴックハル氏の如きあり、ゾラ氏の如きあり、其勢力の及ぶ所實に甚少なりとせず。但だ悲む可きは、自然説の進行不幸なる進化を爲し、相率るて卑猥褻瀆の境に向ひ、一往不還の現状を呈し來りたり之れが爲めに倫理に社交に惡影響を與ふるもの決して甚少なりとせず、是れ國を愛し社會を憂ふる健精の佛國人が嗟咨長嘆する所なり。

願ふに人は癖性に感じ易く、又其癖性に習ひ易き傾きあり、某侯の特色必らずしも好色に非らざる可きも、子弟多く冷郎を出し、某伯の佳處斷じて誇矜の外に在るも、門下多く矜客を見る、我小説家が近ごろ盛に現實説を崇信し、自然派を歓迎する固より以て不可なりとせざるも、亦彼の侯家の子弟伯家の門下と其撰を同くするもの無らんや、吾人は深く國民の健精の爲に社會の風紀の爲めに作家の三省を請はんと欲す。

此他尙は鑪を並べて鞭撻げ途を分ち車を馳する作家には、『ニ・マ・ルーメスタン』

の著者アルフ・フ・ゾ・ド・デーの如きあり。『アイランドの漁父』の著者ピエール・ロ・チーの如きあり。又或はブルセルの如き。キ・イ・ド・モーバ・ス・サンの如きあり。是等晩近の諸作家は概ね厭世的空氣を吸嚼したる悲想的詩人と共に、其撰を同くするの傾向を現はせり。

院 本

十九世紀の初葉拿破崙帝政の下に、時代的悲劇の院本作者を代表せし者は、タルマ(一七六三—一八二六)あり、其後に後れてラセル女史あり。然れども此間演劇に上りたる同種の院本は概ね十七世紀の名作に限られ、多く之を當今に求めず、其の儘に成功したりしは千八百四十三年に見はれたるボンサールの作『リュネレス』ありしのみ。

折柄近體文學の王位に即きしあり、是に於てかユ・ゴの諸作を始めとし、アルフレード・ヴィニ、シャタテルトン』は千八百三十五年に、初代アレキサンデル・デュマの『顯理三世及朝廷』は千八百一十九年に、『アントノイ』は同三十一年に、『大名邸に於ける查耳斯七世』は同三十三年に相次ぎて出で、同四十三年に至るま



では、是等の諸作其場を擅にしたり。爾りしよりこのかた是等歴史的即ち時代的諸作の色彩は尙ほ世人の歸依を失はざるも、其流行後れとなり來りたるの觀あり。忽爾として、*スクリーヴ* (一七九一—一八六一) の豐贍なる諸作出づるあり、其の好みて手を下したる所は、滑稽劇及所謂合狂言的の作にあり、貴族時代を離れ、平民時代に移りたる世人の歡迎異常にして、其の『ベルトランとラトン』は千八百三十三年に『繩着き』は同四十一年に、『一杯の水』は同四十一年に、『女合戦』は同五十一年に、相次て出て、後世此種院本の手本となれり、是れ則ち十九世紀中葉の新現物なり。

蓋し所謂今世の院本家は千八百五十年の比はひより彼の小説家と一般、現實派となり、好みて人の失徳及可笑味を採取し、歴史的院本の研究は研究とし、其傍に立ちて現代社會の狀態を描寫し出したり。是に於てか同じく感情の解剖上より悲愁劇に接する滑稽劇は發明せられ、別に一種の活動と包彩とを而も正確なる人情の上に發揮するには至りたり。願ふに嘗て、*ボンサール* は其著『シャルロット・ユルグイ』、『名譽と金』、『愛らしき獅

子』に於て、舊體と近體との調和を試みたり、然れども其人自ら寧ろ舊體の刷新者たれば、其調和を試みたる手と心は、臆病にして明快ならず。新種院本の眞の創造者とし推す可きは、*エミール・オーシャエ* (一八二〇—一八九二) ならん。此人の見はしたる思想、勢力及文章は、優に新派の祖とし崇ふに足るものあり、其名作『冒険家』(一八四八)、『ボワリエの婿』(一八五六)、『鐵面皮』(一八六一)、『銃獵者の子』(一八六二)、『ジャン・ド・トムムレー』(一八七三)、『フール・シャム・ホール』(一八七八) は之を證して餘りあらん、是より滑稽劇は愈々振へり。

*エミール・オーシャエ* に前後し、滑稽種院本作家を叙述せん乎、二代、*アレキサン・ド・ル・ヂュマ* は、人情の冷澆、思ひ切たるあきらめ、奇僻なる意思等を寫すに最も長し、其著『半世界』(一八五五)、『私生の兒』(一八五八)、『マダム・オープレイの思惑』(一八六七)、『外國人』(一八七六) の如き、其成績の影響せし所實に甚なしとせざるなり。次には、*ヴィクトリアン・サルツウ* ならん、此人の富贍巧妙にして且つ變化多き手腕は、『我親愛者』(一八六一)、『アノット一家』(一八六五)、『愛國心』(一八六九)、『離縁者』(一八八六) に由りて見ることを得べし。而して佛國



に取りて慶幸の著作とし歓迎せらるゝは、ユ、イ、セ、イ、ヌ、ラ、ビ、シ、(一八一五…一八八七)のそれならん、其著『ベリシヨンの旅行』の如き、『伊太利の麥藁帽子』の如き其愉快にして氣嫌好き、眞にゴッロフ固有の思想の發揚ともいふ可く、直ちに歩をモリエールに接し、其再生ともいふを得ん歟、其諧謔嘻笑の裏に、萬物の靈たる人間の深遠なる自覺を寓し、而も厭世的悲哀的結果に陥いらざるに注意したる、佛國人の嘆稱して措く能はざる所なり。

尙ほ後半世紀に於ける院本の作家を擧ぐれば、マ、ダ、イ、ム、ド、シ、ラ、ル、デ、ン(一八〇四…一八五五)は『畏わいことした嘻れしさ』を著はし。シ、ニ、ル、サ、ン、ド、ー(一八一…一八八三)は『マドモワゼル・ド・ラ・セイグリエール』を出し。オ、ク、タ、ー、ヴ、ン、イ、エ、ー(一八一二…一八九二)は『ダリヤ』及『一貧人の小説』を。テ、オ、ド、ー、ル、バ、リ、エ、ー、ル(一八二三…一八七七)は『虚その結構者』を、ル、グ、ー、ヴ、エ、は『アドリヤンヌ・ルクロール』及『勝者の權利』を著はして名あり。ド、ボ、ニ、エ、ーの作『ローランド女』は千八百七十一年今も尙存せる名優、サ、ラ、ベ、ル、ナ、ー、ル之を演し、一世の稱賛を博せり。又、バ、イ、ユ、ロ、ンは『嫌やな歳』、『光輝』、『苦の世界』等を著はし、メ、イ、ヤ、

ク、及、リ、ド、ッ、ア、レ、グ、イの二氏は、最近の作者として名あり、其の純然たる滑稽の院本としては、『衣裳のさやぐ』の著あり。以上のは作者中生死の年紀を注凡そ佛國ありてより、以來院本の盛なる、未だ十九世紀の如きはあらず、従ひて其諸作は皆に佛國の演劇を繁榮せしめたるのみならず、併して歐洲各都の戲臺を殷賑ならしめたること、擧げて言ふ可からず。

諷刺及辯論

拿破崙一世の佛國は尙ほ該撒大帝の羅馬のごとく、國內に諷刺批評の自由を見ず。帝國の亡後諷刺の光を爲したるは、ボ、ー、ル、ル、イ、ク、イ、エ、ー(一七七二…一八二五)より始め、其諷刺を讀めば、恰も金鍼の竅を刺すが如きを覺ゆ。次きて、コ、ル、ム、テ、ンあり、『針路』の編を著はして、所謂七月政府を代表したる當時の政事家を攻撃せり。最後に、ロ、シ、ニ、フ、オ、ー、ルの出づるあり、其新聞『燈明』に於て帝政を批難し、幾ど其の餘力を留めず。

更に議會演壇上辯論術に看到れば、一世帝政の一敗後、千八百十五年再びゴッロフ天賦の快辯を此高處に迸發し來りたり。今其最も著はれたる人を擧ぐ



れば、ブルボン王家の復古時代には、ロワイエール、コルラル（一七六三—一八四五）あり、此人は同時哲學の講坐に於ても聞えたり。又ベンヤミン、コンスタン（一七六七—一八三〇）あり、此人は又一面に於ては著名の小説『アドルフ』を以て其の名を知られたり。又七月政府の下に在りては、將軍フォワ（一七七五—一八二五）あり。カシミール、ベルエー（一七七七—一八三二）あり、又等しく歴史家にして有名なる辯論家には、齊しく邦人の稔聞せるギゾーあり。チエールあり。其他、モンタラム、ベルあり。而して千八百四十八年に雄辯の名を擅にせしは、今古獨歩の文豪ラマルチエ、其人ありき。

拿破崙三世の帝政に辯論復たび寂焉たり。三世仆れて言論の自由恢復せらるゝや、千八百七十年、佛國は再たびチエールの洪聲を聞くことを得。同時に一大愛國家なるカム、ベッタの快辯は議院の屋場を震蕩し來りたり。

議會の演壇に於けるが如く、辯護士の辯論席にも、亦辯論家其人に乏しからず、ベリエー（一七九〇—一八六八）の如き。チエール（一七九八—一八六八）の如き。ジョール、フア、ヴル（一八〇九—一八八〇）の如き。其最も著名なる者なりき。

最後に記す可きは數世紀間株守し來りたる臆説の下に置かれたる講坐の上、に、人の心目を快にす可き新説の現はれたるも、亦此世紀に在り。是に於て兩者の間激甚なる衝突を起したる結果、終には舊來の臆説を拋棄せざる可からざるには至りたり、是れ道徳問題上、就中、社會的、道徳問題上に於て最も其の然るを見る。此講坐の辯論及著述に關し、最も著名の二三子を概舉せん乎、ドミニク、ン宗派のラ、コル、テ、ール（一八〇二—一八六一）は宗教と革命との調和一致を試み。ラ、マン、チ、イ（一七八二—一八五四）は千八百十八年『宗教材料の無頓着』を著し、同三十一年には復た『信徒の談』を著し、神秘的諷刺を試み、兼ねて社會主義者の福音を傳へたり、是が爲に一世の感動を惹起したる、亦尠少にあらずらざりき。

### 文學的批評

文學的批評も亦十九世紀に至りて大に發達したり、今其經過を一顧すれば、最初史學研究の方法に關し、ラ、ア、ル、ブ、田で、文學的批評を試みたるもの、之が權輿となり、是れより史學の面目に一大刷新を生じたり。次ぎて、ヴァール、メン



(二七九〇)一八六七あり、此人は歴史家にして文學家雄辯家にして政事家なりしが、有名なるソルボンヌの大學に於て常に文學的批評を試み、終に此一新事業を成功するには至りたり。之と前後し、セント・ブーヴ(一八〇四—一八六九)は其著『月曜講義』に由りて、斯學に培かひ。又セン・マルク・シャルデン(一八〇一—一八七三)マニール・シャトン(一八〇四—一八七四)ニザール(一八二八—一八九三)の徒の輩出すあり、最後にテ、ヌ(一八二八—一八九三)出で、文學の諸大家を刺衝して愈、批評の園内に入込ましめ、斯學をして無かる可からざることを學界に感得せしめたり、其著『ラフォンテーヌ』の如き、『英國文學史』の如き、一世を感動せしむる也。

以上記したるが如く、文學的批評は、其初め史學研究の方法に關して起りたるも、其の發達するに及びてや、獨り史學に止まらず、一般の文學界に彌亘し、今や再び進暢して批評なるものは、社會一切の生事に對し、必要缺ぐ可からざる要具となれり、即ち之に由りて、事物の進歩を刺衝し、發達を啓誘し、つゝあるもの、其れ以て如何と爲すや。

## 佛國の美術

### 建築術及紀念物上

十八世紀の末造に於ける佛國の建築は、概して古風を追ひ、以て此十九世紀の前半に至りたり。夫の大革命は破壊の時代にして、固より建設の時代に非らず、従ひて建築の以て觀る可きものを遺留せず。拿破崙一世は其れ埃及の古王ラムセスの再來乎、其の人は夙に大を好み、殊に戰捷の名譽を永く紀念に留めんことを欲したり、故に一世の治世中、壯大の建築を興したるもの、極めて多し、英雄の爲す所は古今東西其れ同軌なる歟。今ま其の最も著大なるものを、擧數せん乎、帝は、シャルグレンに命するに、星座の大凱旋門の建築を以てせり、是れ佛國の名作物の一にして、其建築に三十年を費し、帝の挂冠後より算するも、復た二十年を過ぎ、千八百三十六年に竣功せり。

之を聞く、千八百六年拿破崙一世、オーステルリッツ大捷の紀念を留めんと欲し、名匠シャルグレンに命じて、星座凱旋門の建築を興し、が帝の挂冠に先だち



て、シ、グ、レ、ン、歿、し、グ、ー、ス、ト、之に代りて、董役二十年、其の人も亦寶を易え、ブル  
 ー、エ、ー、其後を承けて而る後ち始めて成れり。其門や地を扱くこと我百  
 三十尺金を費すこと九百五萬法、名將勇卒の貌、龍孳虎擲の狀、彰明較著實に  
 鑄鏤の妙を極む。余一口登覽を試む、門を中心とし、大衢小街四方より皆此  
 に集中す、恰も北辰の其處に居て衆星の之に向ふが如し、星座の稱ある所以  
 なる歟、而して其四通の四大衢には、概ね帝が大捷の地名を命したり、イ、エ、ナ  
 大路、ワ、グ、ラ、ム、大路、フ、リ、ー、ト、ラ、ン、ド、大路、大軍大路等即ち是なり、當時の快夢  
 其れ如何ぞや、而して今日來りて此に登る、三色の國旗、慘として光なく、獨り  
 白雲の其上を往來するのみ、功名畢竟此の如き歟、悵然として泪下る。  
 ヲ、ン、ド、ーム、の高柱、カ、ー、ル、ゼ、ル、の凱旋門、亦昔帝の命して建築せし所なり。

カールゼルの凱旋門は、チ、ニ、イ、レ、ー、の宮趾とルーアル宮との間に在り、其門上  
 の文字中「歐、洲、の、列、強、聯、合、し、來、り、て、再、び、佛、の、一、國、に、敵、す、皇、帝、一、た、び、大、露、を、  
 進、む、れ、は、百、日、を、出、で、ず、し、て、彼、の、如、き、大、聯、合、雲、散、霧、消、し、て、痕、影、だ、に、留、め、ず、」  
 の語あり、是れも亦今日は傷心の一紀念たり。

此他帝の方寸より出でたる大建造の其の一には、所謂名譽宮あり、後ちに寺  
 觀となり、今のマ、ド、レ、ー、ヌは即ち是れ。其二には、オルセー宮あり、後ちに一た  
 び外務省となり、再び會計検査院となり、最後に千八百七十一年「コンミン」の亂  
 に焼失せり。其三には、立法院あり、帝政の後ちブルボン王宮となり、王政の後  
 ち下院となり、商業會議所となれり。

復古時代も亦帝政時代の遺緒を受け、同種の建築に勉たり、贖罪聖堂の如き、  
 ハ、ー、ト、ル、ダ、ム、ド、ロ、ー、レ、ットの如きは即ち是なり。七月政府の擧も亦同じく古  
 式に據れり、モリエール泉觀の如き、セ、ン、シ、ユ、ル、ピ、ス、寺觀の如き、エ、ン、ヅ、ア、リ、ド、の  
 拿破崙一世の永眠宮の如き、バ、ス、チ、ー、ルに於ける七月革命標柱の如き、即ち是  
 れなり。

一世が永眠宮の莊嚴なる、一たび殿堂の裏に入れは人をして覺えず形を正  
 くせしむるあり、帝の遺言は棺前の楣上に深刻せらる、其辭に曰く「冀くは我  
 死灰をして我親愛して拵く能はざりし此佛蘭西國民の中央に流るゝ賽納  
 の河畔に憩はしめよ、是れ我願なり」と、嗟乎之を讀みて泣かざる者は、是れ血



なきの人は情なきの人。

建築術及紀念物下

十九世紀の中葉に近づくに及び一方には歴史的研究の一新すあり、又基督的講究方の再生すあり、他方に近體文學派の興起すあり、直ちに美術技藝の領界に向ひて一撃を與へ來りたり。是に於てか千八百三十五年の比ひより、建築家の腦中に羅馬の古建築就中大殿堂の建築方を崇尙し、玩味し、模倣し、掬取するの概念突として觸起せり。是に於てかラシ、ハ、セント、ハ、ベルの聖寺を復古し、ノ、ト、ル、グ、ムを復古し、及シ、ハ、トルの殿堂を復古し。ル、ハ、ハ、ルは、クリ、ニ、博物館及テルム宮を建築し。ボ、ス、ウ、ル、ワ、ルは、ラ、ン、の殿堂を建造したり。殊にウ、オ、レ、ル、チ、ツ、ク(二八一四—一八七九)は此種大紀念物建築術の有名なる理論者にして、其手に山りてア、ミ、ヤ、ン、の殿堂、ビ、エ、ル、フ、ン、の古城、カ、ル、カ、ス、ン、ノ、の古市は復活したり。古文學の講究が講究のみに止らざりしが如く、過去建築の復活も亦復活のみにして止まらず、正確を求めては歴史と抱合し、終には科學と並行し、齊進するに至りたり。

地平線は既に擴大せり、建築術の再隆し來りしより、獨り各時代の歐洲建築方の善く明らめられたるのみならず、或は建築家の探檢に由り、或は其の他の専門家の啓沃に由り、埃及、ア、ス、シ、リ、ヤ、波斯、古印度の古技術等も亦知悉せられ、延きては遠く支那、日本、墨西哥の特別なる技術までも發檢習得せらるゝに至りたり。加之他方には科學及機械應用の共に一大進歩を爲し來るあり、建築の事業は年を追ひ豊富を加へ、鑄鐵及鐵の使用は日を逐ひ頻繁を致すあり。建築術は爲めに一新せざるを得ざるに至りたり。

是に於てか建築術は以上の數新材料を集めて形成せられざる可からざるに際し、此に所謂、コ、ム、ボ、ツ、ト、式は生出せり。今ま此新建術の生出後佛國に遺留したる紀念物如何と顧みれば、拿破崙三世の命して興したる新ル、ハ、ハ、ルは、ル、フ、ルに由りて建築せられ、舊ル、イ、ヴ、ル宮に接して、一層新技の妙處を見はし。巴黎に來集する萬國の客が、看感嘆稱する大オ、ベ、ラは、ガ、ル、ニ、エ、の建造に係り、二千七百五十萬法を此一劇場に費し、意匠技術の精好を極め、崇大の建物たる巴黎の府廳、オ、テ、ル、ド、ザ、イ、ルは、バ、リ、イ、が手腕を振ひたる所なり。



尙ほ各種の建築に對し、各例を取りて之を證せん乎、寺院殿堂樓塔の中、古羅馬殿堂の建築方所謂オマツアル式を用ゐて建造したるものには、セント・クロチルドあり。所謂コムボット式を用ゐて經營したるものには、セント・オーギュステンあり。君士丹丁堡の古式たる、ビザンチン式を用ゐて創興したるものには、馬耳塞の殿堂あり。最後に、サクレ・クレール大寺觀は、アバチの建築せし所なり。若し其れ鐵製建築物中、其尤大なるものを擧ぐれば、バルタールが構成したる中央市場、ヂュテルが經營したる機械館。就中エー、フェルが建てたるエー、フェル塔は高さ我千尺を算し世界高塔の最高位を獨擅せり。是等は悉く鐵材それのみに由りて形成せられし所なり。

『木室の世、鐵室の世を、ありき歴て、鐵室つくる世とはなりし乎』

『エー、フェルの千尺の塔は、鐵室の世のさきかけて、空に聳えり』

### 彫刻術

今世紀の初葉に於ける佛國の彫刻術は猶ほ他の建築術のごとく、一に古風に遵ひし、例せば、シ、オー、デーが彫刻せし、ザン、ドーム標柱上の拿破崙一世の像の

如き宛然一個の古羅馬帝を現出し。又ボ、ショ、オーが技倆を揮ひたる同柱礎の彫刻の如き。ル、モーが刀削せし新橋上の顯理四世の像の如き。同人の手に成りたるカル、セル凱旋門の駟馬二輪の車の如き。其他當時の諸名匠が意匠を凝らしたる大凱旋門の裝飾の如き、皆然らざるは無し。

之に就き一の面白き話あり、佛王曾て文豪ヴォルテールの爲に、一の紀念を建設せんと欲し、人をしてヴォルテールに就き、如何の形裝を欲するやを問はしめたるに、ヴォルテール之に答へ、余は希臘人にも非らず、又羅馬人にも非らず、異體の裝像は余の欲せざる所、已むと無ければ、其れ裸體乎、赤裸々にして、以てヴォルテールが天眞を全くせんのみと、是れ十八世紀の事なりと雖も、如何に當時の彫刻が古式に束縛せられしかを見るに足らん。

惟だ夫れ彫刻は建築の兄弟なり、兄既に近體文學の感化を受く、弟獨り然らざらんや、是に於てか彫刻術にも亦一新時代は乃ち到來せり、其魁を爲したるは即ちブラ、ヂェー其人なる乎、此人一代の傑作として千八百二十四年に現出せし、ブシケ（半神時代に於ける美の現身なる可憐の少女）は希臘當時のヘレニッ



ク審美の古傳に溯り兼ねて最新の意匠を加へて刻出したり(今ま現にルーヴルに在り)。而して全然今代の彫刻を開闢したるは、*ダヴィッド*、*ダンゼー* (一七八九：一八五六)より生まれり、則ち此人一たび出で、羅馬古像的の半靴を廢し、甲冑を廢し、外套を廢し、大革命時代の偉人を表はすに、一に當時の服裝を以てせり。之と前後して出でたる大膽なる技術改革者の一人には、*リッポ*、*ド* (一七八四：一八五五)あり、千八百三十八年星座大凱旋門に彫鑄したる國歌、*マルセイユ*、*イズ*の一團を表出せる諸像の如き、一代の名作として傳へらる。又、*パリー*といふ人あり、好みて動物を彫刻し、別に一生面を開きたり。

今代の彫刻既に發生す、意匠に於て本原に於て相異なる巨匠名工接踵して起るあり、佛國的彫刻なるものは是に於てか煥乎として光輝を四射せり、然れども、之れを總ぶれば是れ亦現實派と想像派の二大天潢に歸著す可きのみ。

此に佛國的彫刻の名家と、其名作物との一斑を概示せん乎、*エト*、*メー*、*ミ*、*レー* (一八一六：一八九一)が彫刻せし、*アレシャ*に於ける、*ゴールの古名將*、*ヴェルゼンゼ*、*トリ*、*バクス*の像の如き。及同氏の手に成りたる、*オペラの*、*アポロン*一團の如

き。*ギ*、*イ*、*ヨ*、*ム*の諸作就中、*アカデミー*に彙集せられたる同氏作の諸半身像の如き。*フレ*、*ミ*、*エ*の諸作動物一團の如き。*カル*、*ボ*、*ー* (一八二七：一八七五)が作る、*ル*、*ザ*、*ール*宮の花神の如き。天文臺街の、*四大洲大表像*の如き。及、*オペラの*、*舞蹈*一團の如き。又有力なる現實派、*フル*、*ギ*、*エ*、*ール*が、*ヂ*、*ヤ*、*ー*、*ヌ*の像の如き。感情表彰に堪能なる、*シャ*、*ビ*、*ニ*、*ー*が、*ジャン*、*ヌ*、*ダ*、*ルク*の像及美術學校に於ける、*畫家*、*レ*、*ニ*、*ヨ*、*ール*が、少壯時代の像の如き。又想像派中最も富想なりし、*バルト*、*ル*、*ヂ*が、*ベル*、*フ*、*ォ*、*ール*に於ける、*大獅子*の如き。新約克に於ける、*世界を輝かせし自由の現身*の如き。

*ベル*、*フ*、*ォ*、*ール*は佛國東北部の一府なり、普佛の大戦に際し、國を受け、和約調印の日に至るまで嬰守降らず、今に至るまで佛人の名譽とする所、*バルトル*、*チ*乃ち近傍の巖山に就き、直に一巨巖を斧削して地度より生へ抜き、の一大獅子を刻出し、前兩脚を支え、屹として獨逸を睥睨せり、意匠雄渾なる手腕の堪能なる人々の嘆稱する所なり。若し其れ新約克の埠頭に聳立する自由の女神の如何に壯嚴端麗なるかは、此地に一遊したる邦人の皆目撃して稔知



せる所ならん。

又深く雅典の彫刻に沈潜せしドラフランシスがセントクロチルド街に遺こしたる犯後の女祖エダの像の如き。又母の教育の現表の如き。エルチストバリヤがベルナオールドバリシイの像如き。メルシエーがクロリヤヴィクチスの像。ダルイーが千七百九十八年の革命的議會を現はしたる礎彫りの如き。或はイドラがメルキール神像の如き。或はブーセーが地球の現身の如き。其他ロダン等以下指屈するに遑あらず、或はリキサムプール博物館に於る諸作となり、或は巴黎府廳に於ける彫刻となり、之を都邑の間に求め、之を諸博物館に採りなば幾ど無盡藏の感あらん。

「クラシック」畫派

詩歌といひ文章といひ建築といひ彫刻といひ繪畫といひ音樂といふも、其の歸結する所の妙處に至りては未だ其致を一にせずばあらず、歸結既に其の致を一にすれば、其の経過し來る可き道路も亦一ならずばあらず、今ま請ふ之れを繪畫に徴せん。十八世紀の末葉に當り、古畫の摹倣は端なく佛國の繪畫に

入來れり、是れ亦他の諸技術に於て尙古論が今日の進歩を産出するの母となりたるに異ならず。

此繪畫復古の時代に於ける名畫家を舉數せん乎、主としてダヴィッド(一七四八：一八二五)を推さざる可からず、顧ふにダヴィッドの當時に獨出せし所以のもの蓋し三あり、第一は彫刻的華麗の筆を用ゐて、古代の事跡を寫し、に在り、ルーヴル宮裏に在る「サビイヌ掠略」の圖の如きは即ち是れなり、第二は生動的快活の筆を用ゐる、現在の活劇を書きしに在り、路易十六世の下に召集せられたる平民議會が「マード・ポームの盟誓」の圖の如きは即ち其一なり、第三は決心的直入の筆を揮ひ、人物の肖像を繪きしに在り、「マダム・レカミエ」及「法皇ピエール七世」の像の如き即ち是れなり。

ダヴィッドと時を同くし、優雅なる獨得の色彩家を以て聞えたる人には、プリニ(一七五八：一八二三)あり、其名作「ゼフィールに奪はれたる戀愛の神女、アシケ」の如き最も世に知らる。又ダヴィッドの門下より出で、各一家を爲し、丹青の妙を極めたる人々を擧ぐれば、シロテ、イ(一七六七：一八二四)あり、「アタラの葬式」



及「洪水滔天」の圖等の傑作あり。又ゼラール(一七七〇—一八三七)あり、巧妙なる肖像家を以て知られたり、其名作には「戀愛及アシケ」の畫あり、又同門下にグロース(一七七—一八三四)あり、歴史畫の大作に長じ、拿破崙一世の大戰多く此人に由りて寫出せられたり、就中「エイローの大戰」の畫の如き、其傑作として推稱せらる。

近體畫派

所謂近體畫派の先を爲したるは、則ちゼリコール(一七九—一八二四)なり、千八百十九年此人の出したる有名なる「メヂニス號難破」の圖は畫法革新の一舉として認めらる。ドラクロワ(一七九八—一八六三)も亦近體畫派先達の一人なり、其作には「詩人ダンテ及ツルシャール」あり、「スシオの塵殺」あり、「アルゼーの婦人」あり、「メデー」あり、就中「十字軍君主丹丁堡入府」の圖は尤も其傑作と稱せらる。蓋しドラクロワは夙に近體文學に私淑する所あり、活動に於て色彩に於て感情慾念激蕩の印象に於て其畫の常に之に一致せんとを勉め、好みて中世東洋趣味の畫を作れり。レオポール・ロベールも亦此派に屬す、其名作に

は「ナイバル派、名畫家」の圖あり。アラーセブ、フルも同派の人なり、其の作には「ミニオン」及「フランソワ・イズドリミニ」あり。ポール・ドラロ、シニ(一七九七—一八五六)は近體畫家中の温和派と稱せる、史家オーギュステン・チエリ、及其從弟と世を同くし、之と友とし善し、好みて歴史畫を作り、其畫は折衷畫を出せり、「エドワールの諸兒」「ギース公の變死」の作あり、就中「美術學校」の「半圓球」は希臘、羅旬、ゴチック及佛國畫復活四時代の技術を現はし、其上に近體畫の登極を表彰したるものにして、蓋し傑作中の傑作ならん。

尙ほ此派に屬し、一旗幟を翻したる人には、オーラス・ヴェルチ(一七八九—一八六三)あり、亞爾塞侵略の作に由りて最も名あり、就中「アブデルカデルがスマラの占領」の畫は一世の心目を快にしたり。

之に就き一佳話あり、ヴェルチ居常猶太人を喜ばす、一夕猶太の富豪ロスチャイルド、宴を開きて客を延く、ヴェルチ亦其中に在り、主人自家の肖像を此畫客に囑す、畫客固より主人の客を知れば三十萬法の潤筆を得て之を作らんといふ、主人其高價を難じ、之を減せんとを求め、終に果さず。佛軍の亞爾塞



を占むるや、蠻酋アアル・カアル之に抗すると十五年、最後に戦敗れて、スマラの幕營を取らる、此際猶太人集りて其金銀財寶を掠奪して餘すなし、世人之を醜とせり。後ちヴェルネーの此戦圖を畫くや、意匠慘憺、當時激闘混戦の狀歴々として目に睹るが如し、圖成りて威爾塞宮上に見はるゝや、一世の嘆稱異常なり、而して猶太人の醜態、一見唾棄を催さしむ、中に一猶太人の最も貪婪を逞くする者あり、其面貌を視れば、宛然たるロスチャイルドなり、是に於てか無代價を以て前の委囑を充たしたり、歐洲の猶太人を惡む者之に對し手を拍ちて快と呼ばざる無し、是れよりヴェルネーの名聲歐洲の文壇を動かせり。

若し其れ同派中最近の作者を擧ぐれば、フロマンテンあり、色彩家にして意匠家なり、其の亞爾塞を畫き出すや、人以て眞の亞爾塞の風光よりも美なりと爲す。又シャル、ミニル、レ、あり、最も以て悲想に富めり、『恐惶世下の慘狀』の如き傑作とし推さる。又クリチ、ルあり、『羅馬頽壞時代の淫樂』の圖は、ルーセル宮中に在りて人目を惹けり。

### 新クラシック畫派

一方に近體畫派の彼が如く勃興隆起したる傍に於て、クラシック畫派は依然其畫法を繼承し來りしが、其間より、エンゲル(一七八〇—一八六七)の出づるあり、圖様の醇粹、排列の美妙、意象の高尙とを以て、更に其畫法に一新を與へたり、是に於てか所謂新クラシックは再現せり、此の人の作には、『路易十三世の誓』あり、『ポルメルの崇敬』あり、淑女の肩にせる璽中より清泉の迸出を寫したる所謂『源泉』あり。之と時代を同くし流派を同くせる者には、レオン・コニエ(一七九四—一八八一)あり、『大畫家テントレイが死たる其女の髪を梳るの圖』は傑作として稱せらる。其他、フランソワ・レン(一八〇九—一八六四)はセント・ヴェンサン・ド・ポール寺の壁畫に其名作を留め。カパチルは、『ヴェニースの生誕』を畫きて世に推され。ゼロームは古代の著名なる活劇を畫き。ブーグローは、『ヴェニースの凱旋』を作り。ポードリは『大オペラの裝畫に於て夙に手腕を見はしたり。』

### 景色畫派



十九世紀の中葉即ち千八百五十年の比ほひより更に一新畫派は生出せり之を景色畫派と爲す是時に至るまでは景色たるものは或は人物畫周邊の裝飾とし或は歴史畫人物の點色とし寫出せられしに過ぎず單直にいへば景色は一の隨伴物邊飾物たりしのみ而して美術の進運は一派の技藝家を催がし山川原野天然の風景其物を捕捉せんことに從事せしめたり其初に當りて之に従事したる者は寥々たる數人のみにして四邊の攻撃は集矢之を射り其矢衰てに立ちて果して成功す可きや否やを疑はしめたるが確乎たる自信と熱心なる講究とは終に大に目的を達し凱歌を奏して鮮明の旗色を畫界の一方に翻へし來れり。

其の創業の主としては第一にコロー(一七九六—一八七五)を推さざるを得ず此の人の藹々たる春霞的丹青の手は鬱樹茂草流水過雲乃至林間の寂地に於ける神祕を開發し山川の神女ニムフをして其塵上に翔翺せしむるの名作を出し一世の心目を傾倒したり。之と並びて二巨匠は出でたり其一是テオドールルソー(一八一二—一八六七)あり喬樞の下矮樹の邊遊塵の詩趣を畫き

たるもの最も其傑作とし聞ゆ。他の一はフランドンクミレ(一八一五—一八七五)とす此人の名畫には『夜の祈念』あり千八百六十七年に畫きし所村夫家畜田舎の客と觸目せし所に據りて眞趣を寫し筆々實に神に入る。

杜少陵名畫家曹氏の不遇を詠して曰く但看古來盛名下終日坎壈纏其身とミレ一の一生亦此くの如きものあり氏は嘗て自ら給せず其心血を澆きたる『夜の祈念』を取りて僅に之を二千法に鬻げり氏の歿後其天才世に隠れなきに及び米人之を七十萬法に購ひて本國に歸れり佛人之を視て咨嗟に堪へず終に百萬法を投し之を償ひて再び本國に復しルーヴル宮中に永く國寶とせしめり其畫の如何以て想見す可く佛人の意氣も亦嘉賞す可きなり。以上三位一體の名家を外にして尙ほトローワイヨンは景をリムーゼンに取りて『耕牛』の作あり『耕耘の歸る』の畫あり。ドイビニはセーヌ河畔、オワーズ及モルザンの風景を寫し。アルピイはアルゴリーニ及オーヴェルニの野趣を現はし。ロザボタールはニヴェルニの田畝牛轡を。マニルバルトンはアルトワの郊原を。最後にパスチャールバト(一八四八—一八八五)は畫室に於け



る人爲の光線を棄て、大氣中の眞光線を捕捉するとを其畫上に試みたり。

實畫派

千八百五十年の比ほひより出現し來たる景色畫派は同時に現實畫派たりき、殊にミレ、其人に於てか之を觀る。同時代に又グーデル、バール（一八一九：一八七七）あり、同じく一の景色派なりしが、其熱心なる主張は終に近世畫上一般に現實主義を奉せざる可からざるには至らしめぬ。且つ此改革を外にして、此人は尙ほ別に醜惡と奇異との二真相を捕捉せんことに勉めにき。是れより而る後ち現實主義は愈々發達し一世を驅りて此方面に向はしめ、此に古格舊法を破却し、森羅萬象の自然の狀態をして自在に畫人筆端に現せしむるの門戸を啓きたり。

今ま之に屬する畫家を概舉せん乎、ビュッ、ス、シャヴァンヌは、詩的美想を以て好みて生活の現狀を寫し。シャブレンは、玉的醇粹を以て殊に少婦の心身を現はし。アンテールは死體の婦女子に手腕を示し。ボンナールは光輝ある肖像家として勢力を一世に有し。カロリニ、ヂランは色彩家を以て名あり。グイ、イ、メ、ハの

亞爾塞の眞景を寫出したる。バン、シャ、メ、ン、コン、スタンの東洋的畫圖に堪能なりし。マン、ポ、ル、ロ、ランの歴史畫を以て近世に獨歩せし。皆此派の豪傑ならざる無し。最後にメイソン、ニ、エ、ル（一八一五：一八九二）は和蘭畫派に起り、終に英雄に對する無聲の頌詩色彩の間に現するに至れり、『イ、エ、ナ』の大戦、『千八百十四年の拿破崙一世』等の如き、觀る者感嘆せざるはあらず。

此他尙ほイ、ヴ、オ、ンの作に係る『マ、ラ、コ、ン、城の占略』及『レイ、ス、コ、フ、マンの掩撃』の如き。プロ、テ、ルが畫に成りたる『攻撃の朝』及『戦後の夕』の如き。ド、メ、イ、グ、イルが手に出でたる『除隊』の圖。ド、タ、イ、ユが筆を揮ひたる『夢想』の畫。今より三年前に成りたるダニヤン、テ、ル、ア、レ、ーが『基督訣別の晩餐』等、其人其畫と亦共に後世に傳ふ可し。

印象畫派及徵象畫派

繪畫の改善進歩彼が如く、未だ嘗て其足を駐めず、此間だ尙一の特記すべき人あり、之を一個の天才マ、チ、エ、とす、此人は千八百六十年の比ほひ現實主義の裏に奇異を現はし、一世の人目を驚倒せしが、印象畫派の父となりしも亦此人に



在り即ち其結果として國様を廢せんと企てたるも此人に在り、光線の屈曲及反映を布衍せんと勉たるも亦此人に在り。印象畫派に次て來りしは、即ち徵象畫派と爲す、此派は徒らに現實を尙ぶ者を賤しみ、靈異及未可議を指導せんと欲するに在り、以上印象徵象の二新説たる畢竟佛國繪畫進歩の結果といふ可きなり。

### 十九世紀初葉の音樂

十九世紀初葉の佛國音樂たる、畢竟十八世紀の所傳を繼承したるに過ぎざりしのみ、蓋し大革命時代に當りては、之が爲に軍樂を作り愛國歌を製し、貢獻せしもの尠なしとせず、其中には太だ美とすへきものも亦これあり、但だ一時に限れるものは、今日概ね遺存せず、今まよりして之れを看れば、當時の音樂たる老衰の域に在るに非らざれば、小兒の境に居りしのみ、然かはいへども其の音樂が樂しむ可き價值を有し感す可き雅趣を挾みたるや、固より亦た言を待たず。

單一にして氣嫌善く精神的にして面白き作者、グレット、リ、イ(一七四一：一八〇

三)あり、オペラ・コミックの爲めに始めて佛國風の樂種を製出せり。次ぎてニコロ(一七七七：一八一八)あり、『ランデー・ヴー・ブール・マヨア』及『マコンド』等を作り一世の帝國を賑はせり。又シ、リ、ビ、ニ(一七六〇：一八四二)といふ人あり、元とフロレンスの産にして佛國人となり、『將軍・オー・シ、リ、葬の軍樂』を製し、因りて以てオペラ・フランセーズの裏に富多の樂器調製方を導きたり、此の人は後に宗教に關する、數多の音樂を製して益々名あり。

同時代に又ス、ボン、チ、ニ(一七七四：一八五一)といふ人あり、元と伊太利の産なり、寡后マセフィーヌ其音樂に堪能なるを聞き、之を庇保すあり、此人『ヴェスタール』及『フルナン・コルテス』の二樂を作り、一大成效を奏したり。斯る音樂家の傍に於て、メ、ユ、ル(一七六三：一八一七)は現はれたり、『クラシク』的單調の辭色を脱し、茲に今世音樂の先鞭を著けたり、其『出陣の歌』、『マロンドン』の軍樂、『ストラトニース』、『若き顯理』就中聖書に據りたる『マセフ』等の諸名作を其の一手より出したたり。

### 十九世紀中葉の音樂



千八百二十年より同三十年に至る約十年間に、佛國の音楽は種々の影響に由りて漸く富麗に赴き、漸く變化に向ひ一般の嗜好なるもの、亦た日を逐ひて明白となり、歳を逐ひて精密となり來れり。即ち千八百二十四年にはオデオンの劇場に外國オペラの音楽を導入し、同二十八年には音楽館コンセルヴァトワールの創立を見。『ピヤノ』、『ハルプ』、『オルグ』即ち『オルゴール』等の樂音は、セバスチヤン、エラル、及其の門下に由りて改善せられたり。

『ハルプ』は我に立琴ポルトといはん乎、之に就き想起することあり、漢土の古詩人好みて箏、篋の謠を作れり、之を彼土の人に質せば、其の樂器今は傳はらずといふ、幸にして我奈其の寶庫に聖武帝御愛の箏篋遺れりと聞く、圖によりて之を看れば、宛然たる、ハルプなり、同物なる乎、非乎、而して中古以來我音樂の衰へたる、朝廷の樂にすら之れを失ひにき、惜む可きことなり。

加之獨逸の有名なる音樂家モザルト及ヒートヴェンの傑作は漸く佛國人に歡迎せられ、巴黎を見舞ひたる伊太利大家の奇趣及光明は幾んど全く此に嚙吸せられ、所謂佛國音樂なるもの、茲に一新繁榮の時代を開始せり。

是時代に當りオペラ・コミックの古傳を繼承したるは可愛の歌曲家ポイエール、ウとす、其名作には千八百二十五年『ダム・ハランシ』あり。之に後れ精神的にして技藝家なるオーベール(一七八二—一八七一)の出づるあり、斯道に勉むること五十八年にして夥多の有名なる製作を出せり、其のオペラに與へし作には『ミニテット・ド・ホルチシー』あり、オペラ・コミックに附したるものには『フラ・ヂャザロ』あり、『アム・パサドリス』あり、『ド・ミノー・ソワール』あり、『王冠の金剛石』あり、『イデー』あり。此間だ又エロー(一七九一—一八三三)のメユルの門下より出づるあり、早く音樂の秘訣を覺り、寧ろ出藍の譽あり、若し之に年を假さば造詣測る可からざる者ありしならん、其名作には『マリー』あり、『ザムバ』あり、就中『ブレ・オー・クレルク』はオペラ・コミックの音樂中森嚴と快活との點に於ては、蓋し第一に居らん。又ポイエールヂウの門人に、アダム(一八〇三—一八五六)あり、『ロン・シュモ』の馭者及『若し我れ王なりせば』の作を以て名を知らる、殊に其『シャール』の作の如き、此種のものにして之が右に出づるもの無かる可し。

千八百二十三年の比はひより佛國に來り、亦終に佛國人となりたる伊太利の



一大音楽家あり之をロシニ(一七九二：一八六二)とす此人ナイフル獨得の怡情と之に加ふるに其音響の奇趣變化及和諧とを以てして佛國人を歡喜せしめたるもの言ふ可からず其製作には『セヴィールの剃鬚師』あり『オリイ伯』あり『コレンツの園み』あり『モイズ』あり就中『グイヨーム・テル』は其傑作とし推さる是千八百二十九年の作なり。ロシニに後ること二年千八百二十六年亦來りて巴黎人となりたる有名の樂家にメイエルビール(一七九四：一八六四)あり此人は猶太人にして伯林に生れ獨逸伊太利兩國に在りて夙に其技を見はし巴黎に來るに及びオペラ・フランゼーズに於て『ロバール・ル・チャール』を奏じ忽ち名聲を得たり爾來二十年間常に一等の地位を占む其作には『エグノー』あり『豫言者』あり『北の星』あり『バルドンド・プロエルメル』あり『アフリケン』あり其作たる變化強硬及深奥に富めるを以て稱せらる殊に語中の一字を易え原音を損せずして別義に轉する所謂轉字法の技に至りては此人の特得たりき斯の如きは夙に我邦人の尤も嗜好する所。是時に當り更に兩伊太利人の音楽を挾みて佛國に移るあり其一是ドニゼッティ

一(一七九八：一八四八)とす此人は即吟家<sup>ニムフロワイヤツ</sup>を以て推されたり其作には『アイユ・デュ・レシャマン』あり『寵姫』あり。他の一はベリニ(一八〇六：一八三五)とす『ノルマ』及『ビエリッテン』は其名作なり。同時佛國人にも亦一名家ありメイエルビールの同宗旨を奉じたるアレグシ(一七九九：一八六二)は其人なり感激の音響は其擅長とする所『シェイズ』の作あり『シーブル王』の作あり及『查理六世』の作あり又其短句の歌には『ヴァール・ダンドール』あり。最後にベルリオリ(一八〇三：一八六九)の出づるあり其人特有の感得と色彩とを以て近體音楽に革命を與へたり其名作としては『ロメオ及ジュリエット』『オーストの墮落』ありオペラに遺したるものには『トロワイエン』あり。

### 十九世紀季葉の音楽

ヴィクトル・マセーは音楽家中可愛の近體派として知らる其作『掩はれたる歌妓』『ヴァンチットの婚姻』『ガラテア』『女后トバース』『ポール及ヴィルマニール』『ペトルタ』は最も著名なりレイエルも亦近體派の一人なり夙に森嚴なる獨逸の律を嚆吸し改革樂家として新ベルリオリの稱あり其名作には『サクンタラ』あり



り、『シギル』あり、『サラムボー』あり。又ラ、ロ、イといふ人あり、『イースの王』を著はして一世に稱せらる。セン、サ、エンの作は美麗堅確『アスカニオ』『顯理八世』『サムソン及ダリヲ』『フリキエ』以て見る可し。テリ、イ、フは『源泉』『コンペリヤ』『シルヴィヤ』の舞曲に由りて名を知られたる後ち、王それを宣ひし』及『ラクメー』の美劇あり。ヒ、ゼ、ー(一八三八・一八七五)に至りては音楽界のルニヨールなり、生を享くこと長からず、従ひて多く世に知られず、而も科學的色彩的名作『カルメン』を遺し、歿後大に天下に傳稱せらる。マ、ス、チ、ーは舊歌體に於ては『エレンチイ』詩體に於ては『エーヴ』院本に於ては『マン・レンヌコー』『オールの王』『シード』『エスクラルモンド』等富多の作あり。又近くは千八百九十四年伊太利の名家、ヴェル、ヂ、ーは巴黎に來り、オペラに與ふるに名作『フルスターフ』を以てすあり。最後に記す可きは小演劇に對し、オ、フ、ア、ン、ベ、クは『地獄の伶人』『美なるエレノメ島』『巴黎人の生活』及『大公爵夫人』を著はし。ル、コ、クは『マダム・アンゴ』の女』を作り名聲共に喧々たり。

周の善政大に興るや、般の太師樂器を抱きて之に就き佛の文明煥として發

するや伊の名家美想を齎らして此に來る而る後ち善者益善に美者愈美なり國の隆興する古今どなく一なり。



## 佛國の性格

## 地勢及人民

余居常以謂へらく歴史と地理とは終始相離る可からず、故に史學を講ずる者は、并して地學を究めざる可からず、一國の統一と揆離に視るも半ば、地理の關係に坐せり。英吉蘭の愛爾蘭を化する能はざる、埃地利の匈牙利を和ぐる能はざる、西班牙の邦内を一にする能はざる、半ば、人種、宗教、言語等の異同にも由ると雖も、半ば、則ち地理の關係ならずはあらず。今ま夫れ佛國は最も善く統一せられたる國の一なるなり、而して其の善く統一せられたる所以を顧みれば、亦地理の關係に重きを置かざるを得ざるなり。其地勢の概して平坦なるは、夙に人民の往來、交通に資し、中央集憲に資したるものあり、統一の大原因を此に歸せざるを得ざるなり。但し少しく細目に入れば、其裏に自ら差違あるを見る、同く此佛國にして古より統一の端を啓き、古より佛國の精神となりたるは、北のかたリールより西のかたツールに至る一帯に在り、佛人の自

ら稱して、眞佛蘭西と爲すは、此一帯に在り、而して此一帯たる、最も平坦にして、最も交通に便なるの地なるなり、彼の中央の山脈を通して、南方一帯の寔に善く眞佛蘭西と結合するに至りしは、蓋し十六世紀以降とす、即ち人爲の交通開進したる以來とす、大要に視れば、則ち然り、細目に視れば、則ち然り、地勢の以て統一の大原因たる、亦察す可からずや、同時に交通の以て統一の大媒介たるも、亦察す可からずや。

顧みて此國を爲せる民種を視れば、セルトは實に衆國の祖たり、其聚落中心のゴール地方に在りしを以て、ゴロワの稱あり、今日に至り、其醇血を視るを得べきは、其れ只アルターニの地方なる乎。ゴロワと同時に尙、イキールと稱する一民族あり、イベルと稱する一民族あり、今ま尙ほピネチーの山下に住し、一種特別なる言語習慣を存する、バスクは即ち後者の子孫なり。之を外にして南方には、フニシヤ人の到るあり、希臘人の留まるあり、今の馬耳塞は即ち之が紀念とす。次に大に來りしは、則ち羅馬人なりとす、以上は概ね羅匈人種に屬せり、次に雲霞の如くゴールに入りしは、獨逸の蠻族所謂フランク、即ち是なり、



是れ佛國に王朝なるものを建立したる者の權輿なり、其他南方にはサラセン人の來住すあり、北方にはスカンヂナ、人の侵入すあり、與に共に一方に其根を生やしたり。加之中世に至るまで英、獨、西、伊の久しく此國の一分に占據すあり、亦皆血統を遺留せざるは非らず。故に今日の佛國人なるものを提げ來れば、ゴ、ル、ロ、イ、マン、フ、ナ、ク、を三原素とし、之に各種多少の民血を混和し、而る後ち鎔出したる人民なり。而して之を歴史に溯究すれば、是等の諸血を混和して所謂今日の佛蘭西人を鎔出するに至るまでには、幾多の激觸を経、幾多の衝突を過ぎたるかを知らず、故に佛國人は自ら稱すらく、吾人は破壊の易からざる抵抗力を有する人民なりと、自稱といふと雖も亦許す可きの理由あり。

氣 風 上

人あり突然巴黎に來り遊ばん乎、歌歎笑語の聲は、巷衢に充ち、晝は屋氣の樓かと疑はれ、夜は不夜の城を開き、世界主義乎、博愛主義乎、國都の士女は、社交に人種の異同を忘れ、結交に人為の國域を置かず、深更一時オヘラに上れば、天下の

名優場に當り、曉明三事紅樓に入れば、解語の花神酒を歴す、之を觀る者は皆以謂へらく、世界の遊惰なる者は佛國人に過ぐるは無く、天下の奢侈なる者は佛國民に若くもの無けん。一見誰か然か感せざる者あらん。是大間違なり。巴黎の然るは、門戸の開弘して、四海萬邦の客を迎へ、其財囊を傾倒せしめんと欲するが爲めのみ、全體よりして言へば、佛國人は遊惰なるよりも、極めて勤勉なる人民なり、奢侈なるよりも、極めて節儉なる人民なり、否、寧ろ奢奮に近き人民なり。

世人の知れるが如く、佛蘭西は世界の一大農産國なり、即ち是れ農を以て國の本と爲せるの民なり、従ひて佛の強國として、富國として、世界列強の間に介立せる所以のものは、主として農民の力に在り、若し其れ一たび巴黎を出で地方に就きて之を視よ、其農民の耕作に勤勉なる、而も其不撓なる、寧ろ頑強とも稱す可きものあり、且つ彼等が自家の土地を愛することは、妻の夫に於けるが如きものあり、彼等は實に其土地を以て自家の親愛なる夫とせる者なり、而して彼等は常に節儉に力め、一文錢をも苟もせず、錢より錢に積み、財産を蓄ふるを



以て彼等の畢生の心願と爲せり。故に細農と雖も多少の財産なきは無く、而も之を他邦に比すれば、其富力豊に超越するものあり、佛の以て富國たる其基礎全く此に在り、且此財産を保護せんと欲し、増加せんと欲するの情慾は乃ち國民の結合力となれり、是に於てか強國たるの基礎も亦多くは此裏より來れり。只だ其れ彼が如く、カチ好きの農民なり、然れども其の最も感す可きは國の危急に際するを視れば、都府よりも多く財を犠供するは、此田舎に在り、都人よりも多く人物を犠供するも、亦此農民に在りと聞く。

但だ其れ利の在る所は、亦害の存する所、佛國の一大病も亦此の裏より胚胎せり。佛國の人口は、久しく繁殖せず、最近數年僅かに不減と微増を統計に示せりと雖も、其増殖の遅々微々たるは、人々の目撃する所、サクソン人中の氣ばやの學者は、早く以て羅甸人種滅盡の徵とまで斷言する者あり。然れども昔し加奈太に移住せし佛人の子孫は、其の先祖の少數なりしにも關はらず、今は、二百萬以上に達せるものあり、繁殖の度よりいへば、傍に多く比類を視ず、是に於てか論者の論斷も亦臆説たるを證見せり。吾人之を疑ふこと久し、今ま始

めて實因を捕捉し得たり、是れ第一農民が財産を重んじ、就中土地を重んずるの結果なり、蓋し多子を産せん乎、其の夫よりも大切なる土地を分割し、之を諸子に頒たざるを得ず、而して彼等が心中には累代の遺産たる夫の身體を解剖するに忍びざるなり、是に於てか一人か二人より以上は子女をつくらざることに力めり、人口繁殖の微々たる主因は實に此に在り。若し精細に之をいへば、其副因は尙ほ多々たり、即ち一には民法が遺言を許さず、平等を基礎として法律の爲めに遺産は平等に衆兒に分割せざるを得ざるにも由れり、之を美法の惡結果とやいはん、美法も中々當てにはならず。二には普通教育未だ普及せず、舊染汚俗の未だ脱却せざるにも由らん。三には移住植民の事業未だ廣く習慣に入らず、家居好みの結果にも由れり。殊に四には個人主義の弊毒深く人々の身中に浸入し、能ふだけ自個の快樂を求むるもの亦原因の多きに居らん。此の賤しむ可く厭ふ可き惡病は、獨り農民のみならず、今まや之れより上流なる都人の上まで波及せり、而して都人の此に至りしは、上に舉げたる主因の外には、殊に第四の副因に由らん乎。且つ夫れ進歩したる生理學の一



惠贈歟、一賦贈歟、避妊の術は今や一般に會得せられ、人工は巧みに多兒を豫防し、以て現時佛國民とはなれり、此倒用の及ぶ所は、其の他の倫理の關係上、何れの處の邊まで行く乎。賤悪す可し。唾棄す可し。

氣風下

奇異なる愛郷心に山りて結合せるも此佛人なり。善財の爲には子孫の繁殖上にまで吝嗇なるも此の佛人なり。然れども一面彼が如く守錢奴的なるにも關はらず、他面を見れば古より今に至るまで、奇妙奇態に介甲武士を出だすも亦此佛人なり、アレキサンデル、ヂマが佛人の徒黨、冒險家及搶掠者を書き出したる『三銃卒』の著は蓋し善く此人民の氣風を寫生したるものと謂ふ可し。惟ふに勇敢は慥に彼が本原なる性格の一なるが如し、之を歴史に徴すれば、ローマ時代より、身を忘れて危難に赴き、勢非にして萬無効なる場合に至るまで、危難に赴くもの、彼が特色の一ならずばあらず。見よや決闘の習慣は、今に至るまで如何なる法律も之を禁絶するの効あらず、試みに之を新聞紙上に討ねよ、彼處の原頭、此處の林間、月に決闘の活劇を視ざるは無し、之が爲めには時

に其身を危難に罪辭に陥いらしむるも辭せざるなり、殊に女子の勇敢なるは往々にして男子に勝れり、古より女丈夫を出したること史上に其蹟を絶たず、此點より視れば佛蘭西は其れ女丈夫國歟。

但し其勇敢は疾速の點に在り、不繼續は彼の弱點なり、是れ則ち左氏に所謂勇にして剛なき者乎、是に至りて吾人は思ふ、身を忘れて危難に赴む。男子勇にして女子更に勇。其勇や則ち疾速にして不繼續。是れ宛然たる日本國民と同一的畫譜ならずや。

彼や既に勇敢なり、而して其頭腦や火山的なり、諺にも佛人の熱衷といふ、彼れが一たび熱衷するに當りては、黄河の大堤を決するが如く、紅火の咸陽を焼くが如く、響ひ逼づく可からざるものあり、ジツクリを視よ、センバル、テルミ、を視よ、紅恐惶を視よ、白恐惶を視よ、コムミンを視よ、就中大革命を視よ、ゴローの子孫を愛す可きは此等の處に存せずや。

兎はいへ、彼にも堅忍の處あり、剛毅の處あり、不動の處あり、無感覺の處あり、ミセルド、オスピタルよりして、セン、ヴェンサン、ド、ポールに至り。エチエンヌより



して、ベネチクテンに至り。リシユニー及ユルベルより、ヂネレロ及カルノ  
に至り。ベルナル・パリシイより、バヌツールに至るまでを視れば、亦以て察  
す可きものあり、未だ一概には言ひ易からず。

以上の方面のみより視れば、佛人は徒らに頑強にして勇敢なるが如くなれど  
も、其平生の人となりには、一種愛すべき温和なる意氣あるなり、家の愛家族の  
愛郷土の愛男女の愛等より之を觀れば、親は子を妻は夫を異郷に出し遣るに  
忍びず、子は親に夫は妻に離れて他境に遠遊するに忍びず、寂々たる山村の少  
年、般闌なる都府に出でなば、寧ろ愉快に生活すべきに、朝夜白屋荒村に戀ひて、  
所謂思郷病に罹る者多しと云。故に我邦人の父母に離れ、妻兒を置きて、單身  
孤劍天涯の歐洲に五年三年流寓するを視れば、其堅忍に咨嗟せずば、非ず、甚し  
ければ、則ち以て人情に非ずと爲す者あり、優さしく女々しき人民ならずや。  
然りと雖も、ボナバルト出で、一たび鞍に憑りて、願盼すれば、天雲の聳き立つ極  
み、谷蝦蟇の狹渉る限り、天涯地角、其後へに従ひて、馳騁するを辭せざる者も、亦  
此優さしく女々しき民なるなり、豈亦以て奇ならずや。

智能

若し其れ智能の最も發達せる人民と問はば、佛國民は優等の地位を占むるも  
の、一なる可し、彼れが政事に、立法に、經濟に、科學に、文學に、美術に、顯彰したる  
智能の働きは、吾人の齊しく認めざるを得ざるものありて存すればなり。

惟ふに道理の崇尚は、此國民に離る可からざる天性の一たるなり、從ひて何れ  
の領界に向ひても、古往今來常に道理を求めて已まず、其情恰も飢者の食を求  
め、渴者の飲を求むるが如き者あり。蓋し彼は合理の境域に達せんが爲めに、  
常に秩叙、方法、證明、論理の法式を採用せり、此宗教的信仰の法式は、一新學說の  
創唱者にて、一派宗教の大開山にて、十七世紀の世運を開拓したる能文の  
記者、巧妙の技藝家にて、十八世紀の憲法を準備したる、恐る可き哲學者、世に  
罕なる諸博識にて、乃至、オゾナル式建築家にて、セムポリスム、繪畫家にて、  
遵奉採用せずといふことあらす。

從ひて夫の三段論法の論斷は、斧鉞の材木に嚮ふが如く、丁々として社會の全  
面を打ち來り、大小の痕跡を印せずば、已まず、此の恐る可き論理の結果は、彼れ



論理的、人民を驅りて、屢、不<sup>レ</sup>論理的行動に出でしめたることも亦多し。視よや  
 セン・ジャストの擧、大革命の擧、就中恐惶亂の擧の如き、皆此三段論法の論斷が與  
 へたる結果ならずや。拿破崙一世が雄圖の如き、因りて來る所を討ぬれば、世  
 界を混一し、寰宇の生民をして四海兄弟を謳はしめんと欲するより出でざる  
 は無し。其の敗れたる跡よりして之を視れば、打壞悲惨往々目を閉じ耳を掩  
 はしめんと欲するものあれども、其の成りたる積よりして之を察すれば、彼が  
 今日粲然たる文明の光明を歐の一隅に輝かすもの、亦此の結果に非らざるは  
 無し。蓋し彼が道理の信仰は、彼が固有の熱衷を驅り遣れる所まで遣て見  
 ど欲するなり。成敗利鈍は、臣が明の逆め、賭る所に非らずといふものに似たり、  
 面白き頼母敷人民ならずや。

此智能の働きに富める人民が、熱愛する智能の發暢は、即ち所謂精神の働きは  
 辯談なり、詩賦なり、文章なり。ゴッロワの草昧時代より、雄辯の美辭を愛する  
 癖好は在々として斷えることあらず、近くは之を三世紀に視よ、十七世紀は基  
 督教の談僧より、コルテイユ及ラシーヌに至り、十八世紀は、シロンドンよりミ

ラボーに至り、十九世紀は、コラール及コンスタンより、チエール及ガムベッタに  
 至るまで、佛人の歡呼如何ぞや。而して此美辭の爛熳たる宮殿の裏、寺院の前、  
 議會の演壇、アカデミーの講坐、楓葉は二月の花よりも紅なり。

若し其れ文章、詩賦の嗜好に至りては、是れ佛人の生命ともいはん歟、其筆は古  
 體詩、散文、近體詩、小説、院本より、以て院曲、歌曲に至り、其人はモンテリニ、メニ  
 ー、ラブレ、レニエ、ラフォンテーヌ、マダーム、セヴィニエ、ザルテール、ボーマル  
 セーより、以てクリリエ、ミューに至り、往時の筆戰者より、以て近體の文學家  
 に至るまで、或は巨に或は細に、金銀となり、斧鉞となり、歡呼となり、攻撃となり、  
 時には則ち惡戯となり、諧謔となり、政治を刺衝し、社會を風動す、佛人稱すらく  
 我精神の働きは、無盡藏下の鑛脈の如し、我佛國文學界の地底より、地底に聯脉  
 せりと、蓋し誇言に非ざるなり。  
 今や辯談及詩文は、古の刀槍劍戟に代れり、流血の慘なく、鐵火の影なく、一快辯  
 善く、大臣を廢し、一名文善く、内閣を更迭せしむ、即ち是れ今世の最好武器とな  
 り、佛人いふ、フロンドは、マザレンより以前に死したるも、フロンゾールは、絶



えることあらずと信然なり。

德能

今ま其れ佛國の社會に就き其の高處を仰瞻すれば往々驕奢の峰の聳えるあり。其低地を俯瞰すれば處々汚濁の水の滯れるあり更にいで、演劇を觀入りて小説を繙けば佛人の德能なるものは其れ幾んど麻痺せる歟抑初めより微茫なる歟を疑はしむ。然れども何れの國民も其の性格を代表せるは主として中等社會にあり而して今世の演劇今世の小説や滔々相將るて奇を求め異を售ひ喝采を求むるの一路に奔馳すれば其の現はす所のものは概ね其の國民の自然には非ず佛人屢説を爲していふ吾人の佳處は目に見えず言に表はれざる所に在りと顧みて我文學界の近狀より之を思へば其言必らずしも辯護のみにもあらず。

蓋し惟ふに十八世紀に至るまで佛國社會の道德を維持したるはいふまでも無く宗教之が首力を占めたるなり而して大革命の一舉は社會道德の根抵よりして一變革を加へ來し故に十九世紀に於ける宗教の勢力は幾んど其精神

を喪失せり。然りと雖も千有餘年扶植し來りたる信仰は百年の能く移す所ならず今日に於ても此人民の德能を刺衝し社會を維持せるの効力は尙ほ決して尠なりとせず。

願て彼が德能の一なる美なる感情の一面を觀れば人民結合の凝集するに隨ひ内外國難の頻至するに隨ひ愈益昂騰し來り謂ふ所の愛國心となりて健然として彼の頭腦を支配し來れり故に吾人は將に言はんぞす佛國民に於ける宗教心の相續者は愛國心なり今や獨り此愛國心あり代りて現代の主人となり此佛國を維持しつゝあり。

此愛國心の暢發を願念すれば、マンヌダルクよりカムベタに至るまで、史上歴々其の跡を絶たず。人あり一たび『マルセーエーズ』を唱ふれば、工場の職工も、田間の農夫も、深窓の佳人も、小學の生徒も、手舞ひ足踏みして之に和し、三色旗後に従ひて、千里を行を辭せざるの概あり。其學校の教育に視よ、初等の普通教育より、歴史地理の教程には、國の不幸を教へ、國の恥辱を誨へ、將來爲す可きの事業を感ぜしむ。視よや彼の大革命は同等の爲に國內一切の特權を廢



棄したるも、地方自愛の法式を廢せず、其個々たる小團愛郷心は乃ち集合して大團の愛國心となり、國際に立ちて發揚し來る。然りと雖も佛國民の徳能は健全の暢發を失ひつゝあり、之を智能の發揮に比すれば、一は趕々として進むあるも、他は遲々として行くを見る。思へ斯くの如きものは獨り佛國のみならず、我國の近狀亦之に類せずや、先覺の士たるものは國民を警醒し、智徳の並進に勉めざる可けんや。

勢力

佛人は誇稱すらく、吾人の最も大創を蒙りたるは前後三回なり。百年戰は其一なり。宗教戰は其二なり。一世帝國の覆亡は其三なり。其回毎に我の出血は太甚しく一たびは生血幾んど枯れ勢力全く竭きたるかを疑はしむ。然れども吾人は平氣なり、創口は立どころに之を癒し、血液は旋りて舊の如く、百年戰の後を承けたる查理七世は、英人を境外に驅逐せり。宗教戰の後を承けたる顯理四世及リシュリ時代は幾んど歐洲に覇たらんとせり。帝國挫敗の餘に起ちたる復古時代は近體文學の繁榮を専らにし、并して之れを四方に光

被せり。吾人は該撤時代より未だ嘗て我勇氣を失墜したることあらず、人あり一たび吾に克ち吾を征服したりしかと思へば直ちに起きて殺ね却し付て他人の軛下に甘せず、我首を懸せしめ、我膝を屈せしむるものは唯だ一の法あるのみと、誇言といふと雖も頗る味あり。

顧みて彼が操行を視れば、彼れ不義の舉に出で暴戻の怒を逞くしたるも亦多し、然りと雖も此人民が見けしたる勢力中には頗る多しとす可き者あり。基督教徒の名に於て、衆に先たち屢十字軍を興したるも彼の人民也、天の生民の名に於て古今未曾有なる大革命を試みたるも彼の人民也、殊に自由平等博愛の名に於て、人權の宣告を爲したるも彼の人民也。加之彼人民は高尚なる目的の爲には、他人の事にも其勢力を見せたり、彼は曾て米國の獨立を助けたり。波蘭の獨立を試みたり。希臘の自由を手傳たり。埃及の自由にも一臂を投したり。南米共和政の創立にも關與し。伊太利統一の事業をも策成しき。彼は此の點に於ては所謂「ドンキコチスム」即ち義俠主義の熱衷者たる感なからず。又彼人民が所謂生靈の三徳を世界に擴播したる、其勢力と



● 功德とは、吾人永く記憶す可し彼の勢力も亦大ならずや。

猶り異しむ此勢力を發揮したる人民彼の文明を光耀したる國民にして。今は世界最も暴戾なる最も野蠻なる國民の後塵を拜し他が願使に従ひて牛馬走を甘しつゝあり是れ畢竟人民の變性乎抑該撒時代より失墜せざりし勇氣の凋衰乎否是れ今日の政府を代表せる政事家に誤られたる虚影ならん吾人之を傍視して私かに憫憐の情に禁へず佛國君や佛國君君が爲に三たび一曲の哀歌を唱へ以て君と手を別たん。

『哀れく、ウホシゴットの、はつこ等は、クザルが前に、うなねつきぬく』

# 現歐洲 終

定價金貳拾五錢

明治三十三年六月廿五日印刷  
明治三十三年六月廿八日發行

著者 福本 誠  
東京市牛込區矢來町三番地

發行者 藤原 周藏  
東京市京橋區瀧山町三番地

印刷者 大野 金太郎  
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社秀英舎第一工場  
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地



## 發行所

東京市京橋區瀧山町三番地

## 耕

## 讀

## 社



米國海軍大佐マハン氏著水交社譯

### 前編 海上權力史論

上下二册 定價金壹圓拾錢 郵稅金八錢

近世ノ世界ハ海洋ノ時代ナリ政治外交商工業ノ上ニ於テ海上權力ノ最モ強盛ナルモノ世界萬國ノ雄トナリ其富榮ヲ極ムルコト疑テ容レズ見ヨ歐米各國ガ如何ニ海上權力ノ培養ニ盡瘁シツ、アルカチ此時ニ當リ四圍環海ノ帝國ニ於テ何ソ一日モ本書ノ發行ヲ緩フスヘクムヤ是レ我水交社及東邦協會ガ本書ヲ譯述印行セシ所以ナリ我大和民族タルモノ其地位職業ノ何タルニ論ナク須ラク本書ヲ精讀シテ海上權力ノ養成ヲ計リ世界萬國ニ雄視シテ富強ヲ致スノ基礎ヲ立テサルヘカラス

米國海軍大佐マハン氏著水交社譯

### 後編 海上權力史論

佛國革命時代

上下二册 定價金參圓 郵稅金貳拾八錢

近世文明殊ニ十九世紀文明ノ發展ハ佛國大革命ニ原因セルモノ多キニ居ル而カモ佛國大革命那翁一世ノ絶世雄圖偉略ヲシテ終ニ失敗潰散ニ歸セシメタル所以ノモノハ他無シ世界的海洋管制權力ノ効果ノミ此書マハン大佐ガ最博大最精深ナル研究精力ヲ盡シ世界文明進步ノ動機ガ寔ニ海洋權力ニ在ル所以ヲ闡明シ而カモ著々之ヲ當年ノ歴史的事實ニ證シ以テ海權ノ最整完強大ナル邦國ガ世界萬國ノ雄タルヘキ所以ヲ明示ス歐洲列國政治家軍人社會共ニ此書ヲ推稱シ近百年來未曾有有益貴重ノ活論トナス允トニ當レリ

東邦協會編纂

### 第一輯 東邦小鑑

袖珍全壹册 凡九百頁 定價金壹圓 郵稅金八錢

本書ハ政治曆即チ「アルマナック」若クハ政家年鑑ノ例ニ倣ヒ東南洋即チ亞細亞洲及太平洋諸島ノ治亂安危ニ關係アル諸邦國諸藩領地ノ國勢ノ要領ヲ撮摘シ之ヲ簡單ニ記載スルモノナリ惟フニ字内ノ勢力ハ西洋ニ發シテ東邦ニ延ヒ東邦事物ノ研究今ヤ正ニ列國識者ノ急要視スル所トナレリ東邦協會乃チ東邦小鑑第一輯ヲ編纂シ自今年每年調査冊成スル所アラント欲ス世ノ經世ニ志アルノ士以テ座右ノ恒友トナスヘク官衙吏僚以テ卓上ノ珍寶トナスベシ

佛國人某氏(匿名)著東邦協會譯

### 支那現勢論

近刊

刻下ノ支那問題ハ列國經濟上ノ必要ヨリ起リ又其必要ハ米濠印度ノ諸境ヲ壓過シテ乃チ此ニ至レル者ナリ本書ハMSナル匿名氏ノ近著ニシテ頃者佛京巴里ニ於テ刊行セラシ支那問題ニ注目スル者ノ先ヲ爭ヒテ購讀シ同時ニ著者ノ姓名ヲ知悉セント欲スル所ナリ抑々佛國ハ露國唯一ノ同盟者ニシテ本書ノ著者ハ時局ニ參スル佛國外交家ノ一人タルヤ疑ナシ故ニ支那ニ對シ列國勢力ノ傾倒シ擴大シ將來世界ノ平和ヲ攪亂シ來ラムトスル真相ヲ叙述論斷スル所ノ者の確明快燭照シテ龜トスルガ如シ



副島伯爵井上博士那珂通世鎌田榮吉君序  
田中幸一郎君著

卷上

# 東邦近世史

定價壹圓  
郵拾貳錢  
稅拾貳錢

從來東邦歴史ノ研究タル區々一邦土ニ限局セラレ  
參照者ニ不便ヲ感セシムルヲ甚カラス殊ニ近世史  
ニ至テハ其其否ハ暫ク措キ一ノ成册アルナシ是豈  
東邦人士ニ取リテ一大耻辱ニアラスヤ本書ハ即チ  
此大缺陷ヲ補ハシガ爲メニ出テタルモノ殊ニ著者  
ハ西洋歴史ノ東洋ニ於ケル開展ニ重キヲ措キ讀者  
ヲシテ自カラ東邦ニ於ケル帝國ノ地位ト責任トヲ  
自覺セシム東邦小鑑ト相須テ東邦ノ形勢展讀輒チ  
之ヲ掌ニ指スガ如キノ感アラム

東邦協會編製

## 亞細亞全圖

定價貳拾錢  
郵稅不要

- 例尺三千萬分之一
- 縱一尺二寸
- 橫一尺五寸五分
- 國界彩色頗ル鮮明

注意 以上圖書東邦協會員ニ限り定價ノ二割引ト

但東邦小鑑ハ一割引トス

發行所

東京京橋區銀座四丁目一番地  
東邦協會

賣捌所

東京京橋區瀧山町三番地  
耕讀社

賣捌所

東京神田區表神保町  
八尾書店

賣捌所

東京神田區表神保町  
東京堂



87  
443



